

平成9年度

慶應義塾大学体育研究所

活動報告書



# 目 次

巻頭言	1
体育研究所所員及び所内組織図	2
平成9年度体育研究所人事	3
第1部 研究分野	
1. 個人研究業績及び研究教育活動	5
2. 慶應義塾派遣留学	15
3. 研究助成・補助金	16
4. 所内定例研究会発表要旨	17
5. 体育研究所プロジェクト研究について	31
第2部 教育分野	
1. 平成9年度カリキュラム概要と履修統計	35
2. 平成9年度スポーツクラス履修者アンケート集計結果	43
第3部 スポーツ振興分野	
1. 各種スポーツイベントの開催	57
2. 大学生生活懇談会とのタイアップ事業	62
3. 横浜市民講座への講師派遣	64
4. 所内施設の開放	65
編集後記	66



## 巻 頭 言

体 育 研 究 所

所 長 高 嶺 隆 二

平成9年9月22日に出された保健体育審議会の答申「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」のなかで、大学における体育・スポーツ等と題して、大学体育の基本的方向は、「真の大学教育の目指す人間教育、人間発達、人間形成とは何か、大学教育を受けた人間の教養ある姿とはいかなるものかを深く、かつ広く考え、それに対応する体育授業の創意工夫を積み重ねる必要が、従前以上に生じてきている」として、さらにその基本的目標は、「学生の心身の調和的発達を促し、心身の不調に対応できる体力の養成を図ること、健康やスポーツに関する科学的理論に裏付けられた運動実践を行えるようにすること、さらにスポーツの文化的価値（教養としてのスポーツ、文化としてのスポーツ）についての理解を図ることを通じて、スポーツが学生にとって生涯にわたって心身ともに豊かな生活を送るための糧となるよう、学生の体系的認識や実践力を育てることが大切である。」と述べられている。

本塾大学における保健体育科目は、平成5年度から藤沢キャンパスの2学部を除き、日吉の5学部（文・経・法・商・理工）で選択科目、医学部では自由科目となっている。

体育研究所では、この間学生が積極的に身体活動に取り組むための体育実技の改革を進め、体育講義を通してスポーツ科学、スポーツ文化、運動生理等に対する理解を深め、さらに保健講義を通して生活習慣病（成人病）予防の医学的知識を知り、自己の健康、体力の保持増進に努め、豊かな学生生活とその後の生涯にわたる健康な生活習慣の構築のための基礎的な教養を養う場を提供すべく努力を積み重ねてきた。

また、学事振興資金の補助を受けて「慶應義塾大学塾生の運動実施に関する実態調査」に取り組み、体育研究所紀要（第37巻1号、平成10年1月発行）で報告した。教育活動については、学生のニーズに応え、さらなる充実を図る目的で毎学期ごとにアンケートを実施して学生による授業評価を取りまとめ、改善に努めている。

このほか「開かれた体育研究所」をスローガンに、学生に対しては各種のスポーツイベントを企画実施、さらに教職員を対象としたフィットネス教室の開設などのサービスプログラムを展開した。ここに、塾における保健体育科目の充実と研究所のよりいっそうの活性化を目指すべく平成9年度の1年間の活動を取りまとめ報告する次第である。

体育研究所は、今後とも諸活動を通して塾の体育・スポーツの振興に寄与していきたいと所員一丸となって取り組んでいる処である。

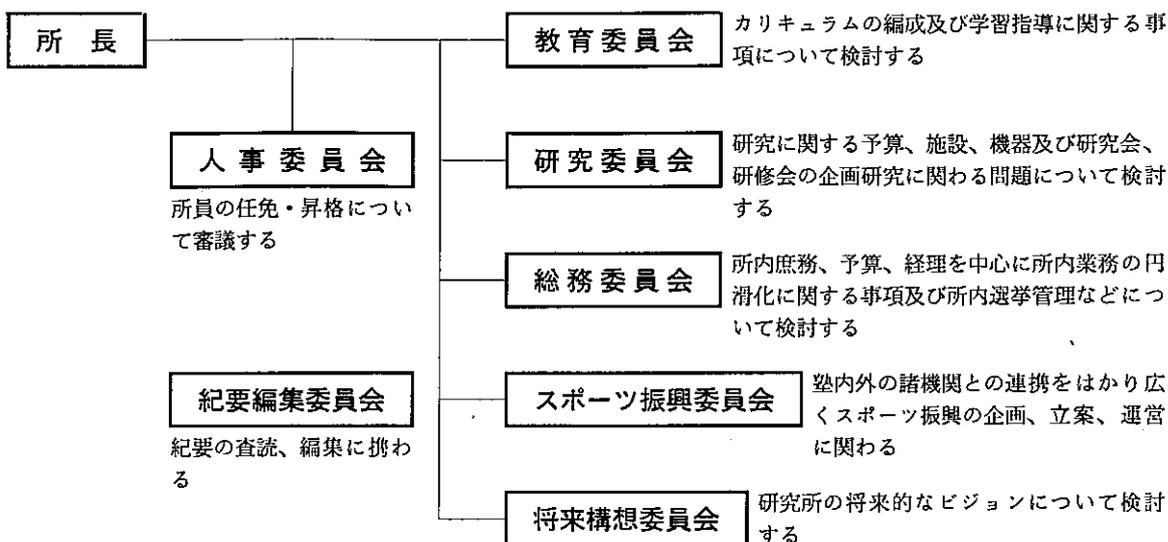
体育研究所に対するご助言、ご要望をいただければ幸いです。

## 体育研究所及び所内組織図

### 体育研究所所員名簿

氏 名		所 属 委 員 会
所 長	高 嶺 隆 二	人事委員会、紀要編集委員会
教 授	橋 本 治 雄	人事委員会、紀要編集委員会
	今 栄 貞 吉	人事委員会、スポーツ振興委員会、紀要編集委員会
	近 藤 明 彦	人事委員会、教育委員会、紀要編集委員会、 将来構想委員会、学習指導主任
	安 藤 勝 英	人事委員会、総務委員会、紀要編集委員会
助 教 授	篠 原 しげ子	研究委員会
	植 田 史 生	人事委員会、研究委員会、将来構想委員会
	綿 田 博 人	スポーツ振興委員会
	松 田 雅 之	教育委員会
	佐々木 玲 子	教育委員会、学習指導副主任
専任講師	石 手 靖	教育委員会、将来構想委員会
	山 内 賢	研究委員会
	吉 田 泰 将	教育委員会、将来構想委員会
	加 藤 大 仁	教育委員会、将来構想委員会、学習指導副主任
助 手	村 山 光 義	研究委員会、将来構想委員会
	野 口 和 行	スポーツ振興委員会、総務委員会
助 手 (嘱 託)	上 向 貫 志	
	田 中 伸 明	
	佐 藤 正 伸	
	小 森 康 加	

### 体育研究所組織図



## 平成9年度体育研究所人事

平成9年4月1日付

安藤勝英  
佐々木玲子  
佐藤正伸  
小森康加

教授昇格  
助教授昇格  
助手(嘱託)採用  
同

平成9年10月1日付

高嶺隆二(教授)  
近藤明彦(教授)  
石手靖(専任講師)  
佐々木玲子(助教授)  
加藤大仁(専任講師)

所長就任(重任)  
学習指導主任就任(重任)  
学習指導副主任退任  
学習指導副主任就任(重任)  
学習指導副主任就任

平成9年11月1日付

御園生博(教務部日吉支部総務課長) 主事退任  
中嶋孝雄(教務部日吉支部長) 主事就任(兼務)

平成10年3月31日付

上向貫志(助手(嘱託)) 退職  
田中伸明(同) 退職  
佐藤正伸(同) 退職



# 第1部 研究分野

## 概 要

日本では医療の発達や少子化により、高齢化が進んでいる。生涯体育の必要性は研究と実践の両面からみても当然の理である。慶應義塾においても社中の多くが、スポーツを謳歌していることであろう。体育学は、人間の身体活動を幅広い専門分野から探求する学問であり、その研究へのアプローチは、自然科学的分野と人文科学的分野に大別できる。そして、この両分野に関わるさまざまな研究領域が総合して体育学研究は成り立っているといえる。従って所員の研究分野、研究活動も幅広く多岐にわたっている。平成9年度の研究活動は、各個人の研究に加え、体育研究所プロジェクト研究（平成8年度発足）、各学会発表、所内定例研究会等を柱としている。体育研究所プロジェクト研究では、「21世紀のスポーツ・健康教育——慶應義塾を発信源として——」を大テーマとし、「今後のスポーツ・健康教育の役割 人文・社会的アプローチ」、「自然科学的立場から見た健康問題」、「スポーツ・健康教育の実践的研究」の3つを小テーマとして掲げた。本年度は、それぞれのテーマにおいて多くの研究成果が見られたので報告する。このことは、21世紀のスポーツ・健康教育への指針として小さな一歩であるが大いに期待が持てよう。また、ここ数年共同研究（プロジェクト研究）、個人研究で慶應義塾学事振興資金研究補助を受け、その成果も公表されている。以下、個人研究業績、所内定例研究会発表趣旨、体育研究所プロジェクト研究報告をまとめた。



1. 個人研究業績及び研究教育活動

今栄貞吉（教授）

論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
佐々木玲子、村山光義、今栄貞吉	異なる測定方法による体脂肪率推定値の比較——健康関連体力測定項目としての観点から——	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1
村山光義、田中伸明、上向貫志、佐々木玲子、今栄貞吉	質問紙による健康評価値の経時的変化および健康関連体力との関係	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）

内容	年月
財団法人日本体育協会主催、財団法人東京都体育協会主管 財団法人日本体育協会公認C級スポーツ指導員資格移行講習会講師	1997.5,6 1997.1
慶應義塾大学スキーの集い スキー講師	1998.2

近藤明彦（教授）

論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
近藤明彦、佐々木玲子、村山光義	学生の Health-related Fitness Level の実態調査（その2）——2回の測定間の比較——	東京体育学研究	1997年度報告	1997.12
田中伸明、近藤明彦、水野忠和、中島宣行	テニスプレイヤーの注意に集中する一考察	東京体育学研究	1997年度報告	1997.12
近藤明彦、佐々木玲子、村山光義	慶應義塾大学健康関連体力テストノルム作成の試み	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1

学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
Dieter Teipel, Akihiko Kondo, Kanshi Uemukai, Mitsuhiro Matsumoto, Yoshio Sugiyama	Beurteilung von Stressbedingungen auf Unterschiedlichen Spielpositionen durch Weibliche Deutsche und Japanische Fussbal	asp-Tagung 1997	1997.5
田中伸明、近藤明彦、水野忠和	プレイスタイルから見たテニスプレイヤーの集中力について	第9回日本テニス学会	1997.11
田中伸明、上向貫志、近藤明彦、佐々木玲子、村山光義、植田史生、山内賢	学生のスポーツ運動活動に対する意識と運動参加の実態	第25回日本体育学会東京支部会	1998.3

### 安藤勝英（教授）

研究教育活動（講演・講師・フィールドワーク）

内 容	年 月
横浜市民講座において講演「日本の柔道、世界の柔道——柔道の国際化と諸問題——」	1997.11
米国柔道指導（SAN JOSE 大学）	1998.2～3

### 篠原しげ子（助教授）

研究教育活動（講演・講師・フィールドワーク）

内 容	年 月
横浜市民講座において講演「ダンス（おどり）の西と東」	1997.11

### 植田史生（助教授）

論文・報告書等

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
植田史生、佐々木玲子、村山光義、田中伸明、上向貫志	慶應義塾大学塾生の運動実施に関する実態調査——体育実技非履修者を含む全学年の調査から——	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1

論文・報告書等

氏 名	タイトル	学 会 名	年 月
田中伸明、上向貫志、近藤明彦、佐々木玲子、村山光義、植田史生、山内賢	学生のスポーツ運動活動に対する意識と運動参加の実態	第25回日本体育学会東京支部会	1998.3

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）

内 容	年 月
慶應義塾大学スキーの集い スキー講師	1998.2

### 佐々木玲子（助教授）

著 書

著 者	書 名	出版社	年 月
佐々木玲子（分担執筆）	女性とスポーツ——動くからだの科学——	朝倉書店	1998.3

## 論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
近藤明彦、佐々木玲、村山光義	学生の Health-related Fitness Level の実態調査（その2）——2回の測定間の比較-	東京体育学研究	1997年度報告	1997.12
Reiko Sasaki	Developmental characteristics of temporal control of movement in preschool and school children of different ages	Perceptual and motor skills	85	1997.12
佐々木玲子、村山光義、今栄貞吉	異なる測定方法による体脂肪率推定値の比較——健康関連体力測定項目としての観点から——	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1
近藤明彦、佐々木玲子、村山光義	慶應義塾大学健康関連体力テストノルム作成の試み	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1
植田史生、佐々木玲子、村山光義、田中伸明、上向貫志	慶應義塾大学塾生の運動実施に関する実態調査——体育実技非履修者を含む全学年の調査から——	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1
村山光義、田中伸明、上向貫志、佐々木玲子、今栄貞吉	質問紙による健康評価値の経時的変化および健康関連体力との関係	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1

## 学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
佐々木玲子	異なる動作部位における動作速度調整	第52回日本体力医学会	1997.9
田中伸明、上向貫志、近藤明彦、佐々木玲子、村山光義、植田史生、山内賢	学生のスポーツ運動活動に対する意識と運動参加の実態	第25回日本体育学会東京支部会	1998.3

## 研究教育活動（講演・講師・フィールドワーク）

内 容	年月
全国大学体育連合研修部委員	通年
日本バイオメカニクス学会編集委員（幹事）	通年
慶應義塾大学スキーの集い スキー講師	1998.2

## 山内 賢（専任講師）

### 学会発表

氏 名	タイトル	学 会 名	年 月
千葉義信、山内賢	スキー場における傷害についての調査	第48回日本体育学会	1997.10
永田俊勝、森田淳悟、 大下聖治、深山元良、 山内賢	バレーボールの国際試合における攻撃の特徴	第48回日本体育学会	1997.10
田中伸明、上向貫志、 近藤明彦、佐々木玲 子、村山光義、植田 史生、山内賢	学生のスポーツ運動活動に対する意識と運動 参加の実態	第25回日本体育学会東京支 部会	1998.3

## 吉田泰将（専任講師）

### 研究教育活動（講演・講師・フィールドワーク）

内 容	年 月
全日本剣道連盟公認社会体育指導員養成講習会・講師： 第7回東京、第8回岐阜、第9回岡山、第10回北海道、第11回熊本、第12回千葉、 第13回警視庁、第14回大阪	通年
全日本剣道連盟情報システム小委員会委員	通年
全日本剣道連盟社会体育指導員委員会幹事	通年
日本体育協会全国スポーツ指導者連絡会議競技団体代表幹事（剣道）	通年
慶應義塾体育会剣道部コーチ	通年
慶應義塾体育会高等学校剣道部師範	通年
全日本学生剣道連盟将来構想検討委員会委員	通年

## 村山光義（助手）

### 論文・報告書等

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
近藤明彦、佐々木玲 子、村山光義	学生の Health-related Fitness Level の実態 調査（その2）——2回の測定間の比較——	東京体育学研究	1997年度 報告	1997.12
佐々木玲子、村山光 義、今栄貞吉	異なる測定方法による体脂肪率推定値の比較 ——健康関連体力測定項目としての観点から ——	慶應義塾大学体 育研究所紀要	37-1	1998.1
近藤明彦、佐々木玲 子、村山光義	慶應義塾大学健康関連体力テストノルム作成 の試み	慶應義塾大学体 育研究所紀要	37-1	1998.1
植田史生、佐々木玲 子、村山光義、田中 伸明、上向貫志	慶應義塾大学塾生の運動実施に関する実態調 査——体育実技非履修者を含む全学年の調査 から——	慶應義塾大学体 育研究所紀要	37-1	1998.1

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
村山光義、田中伸明、 上向貫志、佐々木玲 子、今栄貞吉	質問紙による健康評価値の経時的変化および 健康関連体力との関係	慶應義塾大学体 育研究所紀要	37-1	1998.1

#### 学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
M.Murayama, K.Nosaka, T.Yoneda	Muscle damage and muscle stiffness induced by eccentric exercise	XVIth Congress of the International Society of Biomechanics	1997.8
村山光義、米田継武、 南谷和利、野坂和則	上腕二頭筋収縮時の筋硬度と筋力の関係	第52回日本体力医学会	1997.9
田中伸明、上向貫志、 近藤明彦、佐々木玲 子、村山光義、植田 史生、山内賢	学生のスポーツ運動活動に対する意識と運動 参加の実態	第25回日本体育学会東京支 部会	1998.3

#### 研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）

内 容	年 月
東京厚生年金看護専門学校 水泳実習 講師	1997.7

#### 野口和行（助手）

##### 論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
野口和行	野外教育活動の評価を考える	(財)日本教育科学 研究所 野外教 育情報	1号	1997.10
野口和行	パッケージドプログラムの実際——I O R E (アイオレ) シートについて——	(財)日本教育科学 研究所 野外教 育情報	1号	1997.10
野口和行	パッケージドプログラムの実際——I O R E (アイオレ) シートについて——	(財)日本教育科学 研究所 野外教 育情報	2号	1998.3

#### 研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）

内 容	年 月
大学スケート研究会常任理事	通年
(社) 日本キャンプ協会調査研究委員会研究員	通年
(財) 日本教育科学研究所研究員	通年
(財) 日本教育科学研究所「アウトドアゲーム講習会」 講師	1997.8
(社) 日本キャンプ協会主催事業 「蔵王少年少女ウィンターキャンプ」 キャンプディレクター	1997.12
(財) 日本教育科学研究所「アウトドアゲーム講習会」 講師	1998.1

内 容	年 月
姫路獨協大学 自然活動実習 講師	1998.2
淑徳大学冬季自然活動実習 講師	1998.3

## 上向貫志 (助手)

### 著 書

著 者	書 名	出版社	年 月
上向貫志 (分担執筆)	スポーツと健康	道和書院	1997.4
上向貫志 (分担執筆)	身体教育のアспект	道和書院	1998.3

### 論文・報告書等

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
上向貫志	守護神への道	サッカーダイジェスト	18巻17号	1997.5
植田史生、佐々木玲子、村山光義、田中伸明、上向貫志	慶應義塾大学塾生の運動実施に関する実態調査 - 体育実技非履修者を含む全学年の調査から -	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1
村山光義、田中伸明、上向貫志、佐々木玲子、今柴貞吉	質問紙による健康評価値の経時的変化および健康関連体力との関係	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1

### 学会発表

氏 名	タイトル	学 会 名	年 月
Kanshi Uemukai, Enji Okuda, Aiko Okuda	Parent's outcome expectation toward their children's sport participation	asp-Tagung 1997	1997.5
Dieter Teipel, Akihiko Kondo, Kanshi Uemukai, Mitsuhiro Matsu moto, Yoshio Sugiyama	Beurteilung von Stressbedingungen auf Unterschiedlichen Spielpositionen durch Weibliche Deutsche und Japanische Fussbal	asp-Tagung 1997	1997.5
田中伸明、上向貫志、近藤明彦、佐々木玲子、村山光義、植田史生、山内賢	学生のスポーツ運動活動に対する意識と運動参加の実態	第25回日本体育学会東京支部会	1998.3

### 研究教育活動 (講演・講師・フィールドワークなど)

内 容	年 月
中央大学経済学部スキー実習 講師	1998.2
東京成徳大学スキー実習 講師	1998.2

## 田中伸明（助手）

### 論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
田中伸明、近藤明彦、水野忠和、中島宣行	テニスプレイヤーの注意に集中する一考察	東京体育学研究	1997年度報告	1997.12
田中伸明	集中力のスタイルとは	月刊テニスジャーナル	1998年1月号	1997.12
田中伸明	プレイスタイルからみたテニスプレイヤーの注意の集中	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1
植田史生、佐々木玲子、村山光義、田中伸明、上向貫志	慶應義塾大学塾生の運動実施に関する実態調査 - 体育実技非履修者を含む全学年の調査から -	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1
村山光義、田中伸明、上向貫志、佐々木玲子、今栄貞吉	質問紙による健康評価値の経時的変化および健康関連体力との関係	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1
田中伸明	第4回テニス指導者アンケート調査結果	テニスの科学	第6巻	1998.3
田中伸明、水野忠和	テニスプレイヤーに必要な集中力を評価する	テニスの科学	第6巻	1998.3

### 学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
田中伸明、近藤明彦、水野忠和	プレイスタイルから見たテニスプレイヤーの集中力について	第9回日本テニス学会	1997.11
田中伸明、上向貫志、近藤明彦、佐々木玲子、村山光義、植田史生、山内賢	学生のスポーツ運動活動に対する意識と運動参加の実態	第25回日本体育学会東京支部会	1998.3

### 研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）

内 容	年月
日本テニス学会運営委員	通年
日本テニス学会主催テニス指導者講習会運営委員	通年
青山学院大学テニス実習 講師	1997.9
順天堂大学医療短期大学スキー実習 講師	1998.2

## 小森康加（助手）

### 論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
榎本至、川合寛明、小森康加、州雅明、高橋淳一郎、高橋宗良、藤本秀樹、南隆尚、若吉浩二	水球競技のゲーム分析について——1997年京都総体における試み——	水泳・水中運動研究	1号	1997.11
高橋淳一郎、藤本秀樹、南隆尚、榎本至、高橋宗良、小森康加、若吉浩二、河野一郎	水球選手のパフォーマンスに対する科学的アプローチ	水泳・水中運動研究	1号	1997.11
小森康加、河野一郎、高橋建志、浜田琴美、末木若菜、斉藤まゆみ	運動負荷が平衡機能に与える影響——上肢運動と下肢運動の比較——	体力科学	46-6	1997.12
高橋建志、河野一郎、趙明坤、斉藤武利、斎藤実、小森康加	ラグビー選手における平衡機能に関する研究	体力科学	46-6	1997.12
小森康加、河野一郎、斉藤まゆみ、坂田勇夫	水球競技におけるコンタクトレンズの使用実態	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1
小森康加	ヨーロッパ選手権報告	Swimming and Waterpolo Magazine	22-2	1998.2
小森康加	ジュニア女子水球選手に求めるもの	Swimming and Waterpolo Magazine	22-5	1998.3

### 学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
小森康加、河野一郎、高橋建志、浜田琴美、末木若菜、斉藤まゆみ	運動負荷が平衡機能に与える影響——上肢運動と下肢運動の比較——	第52回日本体力医学会	1997.9
高橋建志、河野一郎、趙明坤、斉藤武利、斎藤実、小森康加	ラグビー選手における平衡機能に関する研究	第52回日本体力医学会	1997.9
榎本至、川合寛明、小森康加、州雅明、高橋淳一郎、高橋宗良、藤本秀樹、南隆尚、若吉浩二	水球競技のゲーム分析について——1997年京都総体における試み——	第1回水泳科学研究会	1997.11

氏名	タイトル	学会名	年月
高橋淳一郎、藤本秀樹、南隆尚、榎本至、高橋宗良、小森康加、若吉浩二、河野一郎	水球選手のパフォーマンスに対する科学的アプローチ	第1回水泳科学研究会	1997.11

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）

内容	年月
全日本選手権水球競技大会のゲーム分析 (財)日本水泳連盟・水球委員会科学研究部スタッフとして	1997.6
学芸大学水球部のパフォーマンステスト実施 (財)日本水泳連盟・水球委員会科学研究部スタッフとして	1997.7
全国女子水球競技大会予選兼東日本女子水球競技大会のゲーム分析 (財)日本水泳連盟・水球委員会科学研究部スタッフとして	1997.7
ユニバーシアードシシリー大会日本代表水球選手のパフォーマンステスト実施 (財)日本水泳連盟・水球委員会科学研究部スタッフ	1997.7
全国女子水球競技大会のゲーム分析 (財)日本水泳連盟・水球委員会科学研究部スタッフとして	1997.8
全国高等学校総合体育大会水球競技のゲーム分析 (財)日本水泳連盟・水球委員会科学研究部スタッフとして	1997.8
ヨーロッパ選手権水球競技大会（スペイン・セビリア）に、大会報道員として参加	1997.8

佐藤正伸（助手）

著書

著者	書名	出版社	年月
佐藤正伸	1997年陸上競技記録集（陸上競技マガジン1998年2月号別冊）	ベースボール・マガジン社	1998.2

論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
佐藤正伸	世界の名ランナー列伝——ヌルディン・モルセリ(その1)——（翻訳）	陸上競技マガジン	47-12	1997.11
佐藤正伸	世界の名ランナー列伝——ヌルディン・モルセリ(その2)——（翻訳）	陸上競技マガジン	47-13	1997.12
佐藤正伸	世界の名ランナー列伝——ヌルディン・モルセリ(その3)——（翻訳）	陸上競技マガジン	48-1	1998.1
佐藤正伸	運動部の運営方法の捉え方と顧問教師の経歴の関係	慶應義塾大学体育研究所紀要	37-1	1998.1
佐藤正伸	競技者のコーチへの心情とコーチの職務遂行に対する期待充足の関係について	本スポーツ方法学研究	11号	1998.3

学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
佐藤正伸	運動部活動における部員の創造性と組織硬直の関係について	第21回日本体育・スポーツ経営学会	1998.3
佐藤正伸	競技者が期待するコーチング——競技者の個人特性による違いに着目して——	日本スポーツ方法学会第9回大会	1998.3

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）

内 容	年月
十文字女子大学スキー実習講師	1998.2

## 2. 慶應義塾派遣留学

### 加藤大仁（専任講師）

留 学 先	SAN JOSE 大学 (USA)	期 間	1997.9 まで
研究課題	1. スポーツ政策形成過程に関する一考察		
	——Pluralism, Corporatism 論を中心として——		
	2. 現代バスケットボールにおける諸攻撃法の検討Ⅱ		
	—— 1-4 offence ——		

### 石手 靖（専任講師）

留 学 先	UCLA (USA)	期 間	1997.9～
研究課題	バレーボール競技に必要なジャンプ能力に関する研究		
	UCLAにおけるスポーツ環境およびスポーツコーチングに関する調査		
留学先での活動			
UCLA Intercollegiate Athletics Department に Mens 'Volleyball Assistant Coach として所属、コーチングを实践			

### 3. 研究助成・補助金

氏名	研究テーマ	助成機関	助成額
植田史生、佐々木玲子、村山光義、田中伸明、上向貫志	現代大学生におけるスポーツ活動の重視度と実施阻害要因に関する調査研究	慶應義塾学事振興金(共同)	82万円
佐々木玲子、小森康加	週一回の運動継続実施が女子大学生の身体活動量、体力水準および運動意識に及ぼす影響	慶應義塾学事振興金(共同)	38万円
村山光義	ECCEPIC EXERCISE 後の筋損傷と筋硬度の関係について	慶應義塾学事振興金(個人)	20万円
上向貫志	塾体育会部員における「心理的競技能力」診断の試み	慶應義塾学事振興金(個人)	10万円
佐々木玲子	動作様式によるパフォーマンスの違いからみた動作速度調整の発達機序	文部省科学研究補助金奨励研究A	140万円
上向貫志	「スポーツ傷害受容診断尺度」の作成及び受容要因に関する研究	文部省科学研究補助金奨励研究A	120万円
佐藤正伸	競技スポーツの指導者における状況適応理論応用に関する縦断的研究	文部省科学研究補助金奨励研究A	120万円
佐藤正伸、長津純一、水田拓道、鈴木 明	体育科月の選択行動の規定要因について	(財)大体連 大学体育教育研究助成	20万円

補助金の名称	私立学校施設設備費補助金	決定金額	6137万円
申請代表者	佐々木玲子		
申請内容	「身体運動解析装置」		
スポーツをはじめとするヒトの動作を測定、記録し、定量的に分析するための機器一式。[ハイスピードビデオカメラおよび画像解析システム、フォースプレート、テレメータシステム等]			

#### 4. 所内定例研究会発表要旨

体育研究所では、月に1回下記の目的で研究会を行っている。

- 1) 所内の研究の活性化
- 2) 各所員の研究分野の理解
- 3) プロジェクト研究の公表

定例研究会の他、不定期で学会発表の予演会も行っている。以下に、定例で行われた研究会の発表内容について報告する。

第1回 4月25日

##### (1) 大腿部筋硬度測定時のMR画像

村山 光義

生体表面からの押圧による筋硬度評価では、皮下組織の影響が問題となる。Horikawa et al (1993) は、硬度を求める変位と力の関係において、皮下組織と筋を二層の弾性要素として扱い、2つの成分に区別して筋硬度を決定しているが、比較的筋量の大きな部位への適応に疑問がある。本研究では、筋量の多い大腿部において荷重を負荷した際のMRIから実際の組織変形の様子を検討した。MRIは、同一測定点で0、100、200、400、600gの各負荷で撮影をした。MRIは、厚さ5mm、スライス幅1.5mmで、測定点前後3スライス撮影した。被験者は一般成人5名(男子1名、女子4名)であった。荷重によって、大腿骨以下の二頭筋側も縦軸方向にわずかに短縮したが、それは600g負荷でも1mm程度であり、荷重による変形はほぼ四頭筋側の変位に反映されていると考えられた。縦軸の変位からは、100及び200gの荷重において、皮下組織と共に筋組織の短縮変形も認められた。この際の変位量は皮下組織厚の範囲内であった。つまり、荷重初期にも筋の変形が皮下組織同様に生じ、皮下組織が圧倒的に先行して変形しているわけではなかった。本結果は、少なくとも大腿部において、変位と力の関係に、皮下組織と筋の2層モデルが適合しないことを示唆するものであった。

以上の内容は、第109回日本体力医学会関東地方会('97.3)に報告した。研究会においては、研究の基礎として、ヒト以外の動物等でのモデル実験の可能性、測定部位の応用などについて助言を受けた。

##### (2) 体育会部員における「心理的競技能力」診断の試み

上向 貫志

スポーツ選手が試合で自らが持つ実力を発揮したり、時には大会で優勝したりする時、我が国では「精神力」とか「根性」といった言葉がこれまでにはよく使われてきた。しかし、これらの言葉は、ある時は集中力を意味したり、またある時は忍耐力、闘争心であったりするものである。つまり、「精神力」という言葉は非常に抽象的な言葉であり、「精神力」の何を鍛えればよいのか、明確にされてはいなかった。このようなスポーツ心理学の現状の踏襲、さらには国内外でのメンタル・トレーニング実施の隆盛に伴い、競技スポーツ状況において何をどのようにトレーニングすべきか、ということが研究されてきている。徳永(1994)は、スポーツ選手に必要な「心理的競技能力」を、①競技意欲、②精神の安定・集中、③自信、④作戦能力、④協調性といった5因子にまとめ、診断テストを標準化している。この「心理的競技能力」診断テストは、実施から得点化、プロフィール診断ま

で開発されており、選手個々の特性的な心理的競技能力の把握、さらには強化が必要とされる心理的側面を明らかにすることが可能であるとされている。

よって本研究では、慶應義塾大学体育会部員を対象として、「心理的競技能力」の診断を行ない、さらに各選手へのフィードバックを行なうことが主たる目的である。この研究を行なうことにより、トレーニングとして最も困難かつ重要である心理面の強化の一助となることが期待される。

## 第2回 5月30日

### (1) 水泳運動が視機能に与える影響

小森 康加

本研究では、水泳運動における運動形態、運動強度、浸水及び流水速度といった諸条件の変化が、視機能に与える影響について検討することを目的とした。

視機能は、視覚系の動揺を観察するために静止視力とコントラスト感度を、眼球運動系の動揺を観察するために調節近点距離、深視力、瞬目回数の測定を行った。さらに眼障害を検討するために、主観的痛覚度の測定を行った。

その結果、静水中での伏し浮きにおける視機能は、陸上での安静時と比較して変化が認められなかった。低速度流水中での伏し浮き、高速度流水中での伏し浮き、低速度流水中でのクロール泳（低強度運動）、及び高速度流水中でのクロール泳（高強度運動）では、静水中での伏し浮きと比較して視機能が低下する傾向を示した。心拍数、血圧、血漿アドレナリン濃度及び血漿ノルアドレナリン濃度などの生理的反応は、静水中及び流水中での伏し浮きでは変化が認められなかったが、水泳運動強度の増大にともない高値を示した。

また、クロール泳を行わせた低強度運動と高強度運動の比較では、高強度運動において視機能が低下する傾向を示した。伏し浮きを行わせた低速度流水と高速度流水では、高速度流水において低下する傾向がみられた。さらに、低速度流水と低強度運動、高速度流水と高強度運動では差異が認められなかったことより、水泳運動にともなう視機能の変化は、流水速度の増大が関与していると考えられた。

主観的痛覚度は、流水速度の増大にともない上昇した。これは流水により tear film が除去され、角結膜上皮になんらかの障害が発生していることが考えられた。またこの時に観察された瞬目回数の増加は、その上皮障害を緩和しようとした結果であると推察された。

以上より、水泳運動は視機能に様々な影響を与えていると考えられ、体育・スポーツ活動における対応策が望まれる。

今後の課題として、水泳運動の継続時間に対する視機能の影響に着目し、さらに 運動終了直後からの回復過程に検討を加える必要性が求められた。

### (2) コーチングの一般方法論の構築に向けた基礎的研究

佐藤 正伸

競技成績の向上への寄与を意図するこれまでの研究は、その要件である身体機能・運動技術・心理構造などの向上策を、各々に探る立場が主であった。しかし、コーチの役割については、その重要性は認識されているものの、検討対象となることは少なく、一般方法論は未構築である。筆者は、ここに問題意識を持った。

ところで、コーチは競技者やチームの状況に応じて、先述の諸課題を統合した「指導目標」を設定し、その達成に向けた指導を展開している。つまり、これまで追求された諸論

を実践的に統合しているのである。この「統合」こそ、コーチングの一般方法論の構築につながる基礎と考えられる。そこで、「統合」の実際、特に「指導目標とコーチの職務の関係」を明らかにしようと試みた。そこで、高等学校における陸上競技のコーチ（顧問教師）を対象とするアンケート調査と回答結果の統計分析によって研究を進めた。

考察にあたっては、まずサンプルを指導目標の違いから分類し、次に、その違いによるコーチの職務認識の差異を検証する、という手順を踏んだ。その結果、身体面の課題の達成を意識するコーチは、スポーツ活動に直結する職務のみを重要視し、これに対し、精神面の課題の達成を意識するコーチは、チームの組織づくりや外部組織との連携といったスポーツ活動とは関連の薄い職務をも重要視している、という傾向が明らかになった。

ところで、この傾向は「指導目標とコーチの職務の関係」に関するおおよそのもので、実践的な示唆には至らないものであった。今後は、質問項目の見直しなどを行い、精度の高い結果を導き出したいと考えている。一方で、今回の主題とは異なるが、「目標設定はどうあるべきか？」という討論を別に行う必要もあろう。本研究が究極的に目指す「コーチングの一般方法論の構築」は2つの討論が交差したところにある。

### 第3回 6月27日

#### (1) バレーボールゲームの発祥

石手 靖

米国留学を控えて、バレーボールゲームの原点を再確認しておくことが望ましいと考えた。そこで桐朋学園大学短期大学部水谷豊氏等の資料を下に、そのゲームの創案時期の背景や発祥してからの普及状況を考証した。

概略としては、1895年（明治28年）、William G. Morgan によってアメリカのボストンでバレーボールは創案された。その背景には YMCA のスポーツ活動との強い関連があった。かなりの年配の人々でも無理なくプレーでき、運動量も少なく、気軽に体育館で一度に大勢の人々がやれるものはないかとの発想から考えられたバレーボールは、当初、ミントネットと呼ばれ、インドのミントンという競技が原案となったようである。ルールも随時改正され現在に至っている。

このゲームが生まれたアメリカのスポーツ文化はどんなものであるのか、留学を通じて十分に体験したいと考える。

### 第4回 7月11日

#### (1) 競技力向上のためのスポーツ教育——本塾体育会の現状——

吉田 泰将

研究プロジェクト3では、「スポーツ・健康教育の実践研究」を大テーマに置き、活動を開始したところである。今回は慶応義塾体育会に対して本研究所がなしうる競技力向上の手助けについて、その方向性を探るべく、各部の活動状況などを報告した。また、今後の調査・研究項目を整理した。

##### 1. 塾長の言葉（平成9年度体育会誌「巻頭言」）

そもそも、慶応義塾体育会は福澤先生の「先に獣身をなして、後に人心を養う」という教訓に象徴されるように、文武両道を堅持することを理想的人間像と考えている。これは学問とスポーツや武道が大学における人間修養の二大支柱であることを示すものである。すなわち、勉学のみ偏せず、また、スポーツのみ偏せず、両方を具備した高

い人格を備えた者として諸君が成長することを慶應義塾は期待しているということである。(本文抜粋)

このように体育会の活動を教育の一環としてとらえ、勝敗のみに心を奪われず人間修養に役立ててもらいたいと考える。

## 2. 体育会理事の言葉(平成9年度体育会誌「体育会に望む」)

改善を要する施設もまだ多い。他校と比較するときわめて貧弱な施設の中で頑張っている体育会部員諸君には頭がさがる。(本文抜粋)

このように、これからの体育施設の充実を計画的に進めて行くことにも我々の研究所が援助できるものと考えられる。

## 3. 平成9年度体育会登録部員数

全塾の学生数の6%に満たない部員数をどう考えるか、部員の確保、特に女子部員の確保が急務であると考えられる。

## 4. 平成8年度体育会各部の主な戦績

全国制覇を果たしている種目から関東レベルで下位リーグに属している種目まで存在している現状から各部に対して個々の対応が必要と思われる。

## 5. 平成8年度慶早戦の対戦結果

38部男子39部門中10勝、女子12部門中6勝の現状から、各部の戦力を細かく分析し今後の強化体制を整える必要性を感じる。

## 6. 各部の活動についての基礎資料の収集

1～5の問題点より、現状を把握するための以下の項目の資料収集を早急に行なう。

- 1) 本年度春季各大会の戦績
- 2) 部員の履歴(戦力分析)
- 3) 練習内容
- 4) 体力トレーニングの内容(計画性の問題、重点項目など)
- 5) 生活習慣(合宿所、栄養管理、嗜好品、余暇活動など)
- 6) スカウティングの現状
- 7) 指導スタッフ

以上のように本研究所がなしうる最大限の方策を考え、体育会各部に積極的に働きかけて行く姿勢が必要と思われる。

## (2) 現代大学生におけるスポーツ活動の重視度と実施阻害要因に関する研究

植田 史生

研究委員会では、96年4月より体育研究所共同研究プロジェクトについて検討を重ね、大テーマ「21世紀のスポーツ・健康教育について～慶應義塾を発信源として～」を掲げ、第1プロジェクト「今後のスポーツ・健康教育の役割 人文・社会的アプローチ」、第2プロジェクト「自然科学的立場からみた健康問題」、第3プロジェクト「スポーツ・健康教育の実践的研究」を組織した。96年7月から研究プロジェクト・ワーキンググループミーティングを行ない各プロジェクト共に成果を出しつつある現状である。我々は、今年上記テーマにより平成9年度慶應義塾学事振興資金による研究補助(共同研究～植田、佐々木、村山、上向、田中～補助額82万円)を受けることができた。第1プロジェクトのテ-

マとも平行して研究が進めていけると考え、今回は下記の研究目的、研究内容を発表した。

研究目的：ライフスタイルとして日常的なスポーツ実施習慣を持つには、高等教育の最終段階である大学において、その意義の理解と実践がなされることが望ましい。しかしながら、「レジャーランド」化した大学生活の中で、学生が実際にスポーツの実践を日常的にどの程度重視しているか、現代の社会情勢の上にある学生のスポーツ文化・意義について検討することが、将来の国民の健康づくり、スポーツ振興を考えていく上の実際的課題であるとする。本研究は現代大学生がスポーツや運動の実施をどの程度重視し、またどのような要因がその実施を妨げて、その結果どの程度の運動実施があるのかについて調査し、大学生のスポーツ観の実態を明らかにする。

研究内容：1年目は大学1～4年生を対象とし、大学生のスポーツ活動に関する意識と実施に関する実態把握のためのアンケート調査（第1次）を実施する。2年目は、1次調査を踏まえたスポーツ実施阻害要因の特定のためのアンケート調査（第2次）を実施し、生活パターンの分類からグループ化を試みる。

以上の研究目的・内容を発表、紹介した。その研究結果は学会・研究会・学会誌・紀要等で発表、報告する事もあわせて報告した。

第5回 9月26日

(1) 「国内における組織キャンプの実態調査」

野口 和行

本発表では、国内の各種団体で行われている組織キャンプの動向を調査し、「いつ、どこで、どんなキャンプが行われているか」について実態調査を行うことにより、これからのキャンプ振興における基礎的資料を得ることを目的とする研究計画を発表した。

対象は、組織キャンプを行っている各種団体1000団体程度で、内訳は、国立少年自然の家などの公立の施設（約200団体）、教育委員会、生涯学習課などの地方公共団体（約400団体）、ボーイスカウト、YWCAなどの公益法人（約100団体）、こども会などの民間非営利団体（約100団体）、その他の民間営利団体（約200程度）である。

調査内容として、各団体について、設立年、連絡先、規模（専従職員数など）、代表者名について調査する。各団体における代表的なキャンプについて、キャンプの特色、場所、日程、参加者（年齢層、人数など）、参加費、宿泊形態、スタッフの内訳、プログラムの概要について調査する。

また、キャンプの準備について、対象者・保護者を対象とした説明会、スタッフに対する打ち合わせ会やトレーニングの方法、事前準備実施の際の問題点、キャンプ実施後の報告会や反省会、報告書の作成、事後評価実施の際の問題点等を調査することにより、今後のキャンプの企画・運営に関する問題点を明らかにする。

併せてキャンプにおいて重要な要素となるスタッフについても、スタッフの職種（学生・一般の区別）、資格の有無、報酬、募集方法について調査し、全体的な傾向を調査する。

なお、本研究は（社）日本キャンプ協会の委託研究で、その成果は「キャンプデータブック」として出版され、組織キャンプを実施している各種団体に配布される予定である。

(2) 大学生の運動・スポーツ活動に関する意識調査

田中 申明

体育研究所研究プロジェクトのI班において、「大学生の運動・スポーツ活動に関する

意識調査」を行った。調査対象は、本塾塾生で、無作為に抽出した 3500 名であった。調査は、1997 年 7 月～8 月に、郵送調査にて行った。そして、今回はその中から、体育実技に関する結果について報告した。体育実技に関する有効回答は、1001 名（回答率：28.6 %）だった。体育実技の履修については、男子では、履修者 62.8 %、未履修者 37.2 %、女子では、履修者 64.8 %、未履修者 35.2 %であった。これらの結果から、男女共に、6 割強の学生が体育実技を履修していることが明らかになった。そして、体育実技を履修した学生に履修した理由について答えてもらった結果、男子で、楽しむため（66.0 %）、単位取得のため（56.1 %）、運動不足解消のため（52.2 %）、女子で、楽しむため（67.6 %）、運動不足解消のため（57.6 %）、単位取得のため（41.4 %）であった。これらの結果から、男女共に「楽しむため」、「運動不足解消のため」、「単位取得のため」という理由から履修していることが明らかになった。また、体育実技を履修しなかった学生に履修しなかった理由を答えてもらった結果、必修でない、時間割の都合、抽選で落ちたといったこれから履修する可能性のある答えが男子で 66.2 %、女子で 52.9 %であり、運動が嫌い、履修する気持ちがないといった体育実技に否定的な答えが、男子 33.8 %、女子 47.1 %であった。これらの結果から、履修していない学生のうち、男子で 7 割弱、女子で 5 割強の学生は、体育実技を履修する可能性があることがわかった。

体育実技の必要性については、男子では、必要 58.8 %、必要でない 7.1 %、どちらともいえない 34.0 %、女子では、必要 48.9 %、必要でない、7.6 %、どちらともいえない 46.1 %であった。これらの結果から、必要と答えたのは、男女共に約 5 割の学生であった。また、必要ではないと答えたのは、男女共に約 7 %であることが分かった。したがって、どちらともいえないという学生を必要であると感じるような体育実技にしていく必要があるように思われた。

体育実技の授業評価については、1（とても満足した）～4（全く不満であった）の 4 段階で評価してもらった。その結果、満足度が高いのは、男子で、授業内容（1.73 ± 0.69）、運動量（1.89 ± 0.73）、期待通り（1.962 ± 0.71）、女子で、授業内容（1.56 ± 0.62）、運動量（1.81 ± 0.73）、期待通り（1.81 ± 0.69）であった。また、満足度が低いのは、男子で、更衣室等の付帯施設（2.63 ± 0.82）、受講した学生とのコミュニケーション（2.16 ± 0.77）、運動施設（2.09 ± 0.76）、女子で、更衣室等の付帯施設（2.63 ± 0.82）、運動施設（2.04 ± 0.75）、用具（1.95 ± 0.63）であった。これらの結果から、満足度が高いのは、授業内容といったソフト面であり、満足度が低いのは、付帯施設や運動施設といったハード面であることが明らかになった。したがって、ハード面の充実を図っていく必要があると思われた。そしてさらに、体育実技の総合的な評価について答えてもらった。その結果、男子で 1.87 ± 0.70、女子で 1.76 ± 0.64 であった。これは、男女共に満足感があったという結果を示しているといえる。

## 第 6 回 10月31日

### (1) 帰国報告——NCAA ルールについて——

加藤 大仁

米国でも日本と同様に学校制度を中心にスポーツ競技が行われているが、大学教育の中でのアスリートの地位及びアマチュアリズムを守るためにいかなるルールが設けられているのか、NCAA ルールを題材に報告する。

まず、アスリートが NCAA 加盟大学で奨学金を得てプレイするためには、原則として SAT テストで 800 点以上をマークし、かつハイスクール時代のコア科目の評定平均が 2.5 以上であることが条件となる。また大学に入学してからも評定平均 2.0 以上を維持しないと練習や試合をはじめとするチームの活動に一切参加できなくなる。

コーチ陣にとってもアスリートの成績は最優先事項の一つで、大学教員と授業への出席状況や、テストの結果等について密に連絡をとっている。

また、練習期間・時間等についても詳細なルールがあり、アスリートであることが大学教育を受ける上での障害にならないような配慮がなされている。

コーチのリクルート活動等についてもルールがあり、ルールに反する行為がなされた場合——例えばリクルートを巡って金銭の授受がなされた等——、大学・チームをはじめとする諸機関の関係者にペナルティーが科されることになる。

確かに NCAA にはあまりに多くの制限がありすぎるきらいがあるが、選手のリクルートをめぐる業者と指導者の金銭的な癒着や、全く授業に出席しないアスリートの存在など、日本の大学スポーツ界の抱える問題を考えると、今後 NCAA ルールのような統一的なルールを設定することが必要となろう。

## (2) Cognitive-theory を否定的に捉える Action-theory について

——西ドイツにおける Handlungstheorie を中心に——

近藤 明彦

近年、アメリカ・カナダを中心とし、認知科学に対して批判的な立場を取るアクション理論を用いた研究者の活動が活発になりつつある。西ドイツにおいてもケルン体育大の Jurgen Nitsch やミュンヘン陸軍大学の Dieter Hackhold が Handlungstheorie として同様の名称の理論を提唱している。本報告は、西ドイツにおける Nitsch らの提唱する Action-theory を中心として日本にはまだなじみのないアクション理論について概説したものである。

両者の基本となる考えは、wholism と言われる全体主義的な考え方である。この考え方によれば、コンピューターなどの情報処理システムをモデルとして捕らえる認知科学的解析法に対して否定的である。すなわち、認知科学的アプローチでは人の情報処理メカニズムを幾つかのサブシステムに分類し説明するわけであるが、そのモデルとなるコンピューターの論理的回路の発達に従わねばならない。また、現在のコンピューターの論理は未熟なものであり、有名な Bernstein 問題等も提示されている。Newell らアメリカ・カナダの研究者、ならびに西ドイツにおける Nitsch・Hackhold らは、この点に関しては同様な立場から問題があると指摘している。

さて、Nitsch らのアクション理論において特徴的なものは、運動行動を全体としてみるという立場に加え、その行動に影響を与えるものとしての認知的あるいは情緒的因子について注目している点である。この立場は、アメリカ・カナダの研究者たちには見られないものである。理論名は同じでもこの2つの立場を明確に分けて捕らえる必要があるだろう。

これらの理論と同様な Wholism の立場を取るものとしては、アフォーダンスや複雑性の理論もあり、現在主流の Cognitive-theory 以外の理論として、注目する必要がある。

第7回 11月28日

(1) 通信教育学生の体育実技についての評価

——キャリスセニックスに関して——

今栄 貞吉

通信教育スクーリングで体育実技「キャリスセニックス」を受講した学生に、受講後アンケート調査を行い、授業の目的、内容、効果、指導方法、授業態度、満足度、施設・用具等について5段階評価を行わせ、その結果に基づいた発表を行った。

受講後の感想についても合わせて発表した。

授業の目的についての評価：

「5」と強い肯定をした者 68.1%、「4」とやや肯定をした者 25.3%で 93.4%の者が積極的に肯定・評価した。

授業の内容についての評価：

「5」と強い肯定をした者 68.1%、「4」とやや肯定をした者 27.5%で 95.6%の者が積極的に肯定・評価した。

授業の効果についての評価：

「5」と強い肯定をした者 63.0%、「4」とやや肯定をした者 27.8%で 90.8%の者が積極的に肯定・評価した。

指導方法についての評価：

「5」と強い肯定をした者 82.6%、「4」とやや肯定をした者 17.4%で 100%の者が積極的に肯定・評価した。

授業態度（自己評価）についての評価：

「5」と強い肯定をした者 47.8%、「4」とやや肯定をした者 43.5%で 91.3%の者が積極的に肯定・評価した。

授業後の満足度についての評価：

「5」と強い肯定をした者 76.1%、「4」とやや肯定をした者 19.6%で 95.7%の者が積極的に肯定・評価した。

(2) 日本の柔道、世界の JUDO——柔道の国際化と諸問題

安藤 勝英

近年、国際柔道では、「柔道衣の色」を巡って様々な議論を呼んでいる。欧州を中心にした「観る柔道」のためには対戦者がそれぞれ違う色の柔道衣を着用するのが望ましい、とする方向に移行しているのに対し、柔道を国技とする日本は、伝統的な「白は純潔を表す」として「白」を主張して柔道衣のカラー化に反対の立場をとっている。

また、柔道修行の中でもっとも重要とする「礼法」についても世界の間では同様の問題が生じている。

言い替えれば、「スポーツとしての柔道」と日本古来から伝わる「武道としての柔道」の考え方の違いからこのような問題が発生している。

では、日本文化としての武道柔道は、どのように発生、考えられてきたのであろうか。

講道館柔道は明治15年（1882年）嘉納治五郎師範によって、天神真楊流の固技、起倒流の投技の柔術を改良、工夫し、体育、勝負、修身を目的とすることから始まった。

「精力善用」「自他共栄」「相助相譲」等の「道」、「礼」がいかに大切なものであるか、これらの言葉から理解できる。

その反面、「武」そのものは、格闘を意味する。一説に柔術そのものの発生は、応仁の乱時に誠極流と称した殺法を主とした技術の始まりであると言われている。

このように二面性を持つ「武道柔道」は、第二次世界大戦終結と同時に廃止となる。数年後、先輩諸兄の努力によって復活したが、その条件としていかに柔道が安全なものか、スポーツ性を強調することの方法しかなかった。この時点に柔道そのものの一次転機があった。

国際的に柔道の進出、紹介は、明治時代から始められた。明治 35、36年（1902、1903年）には、オーストラリア、米国等で実施されている。

戦後、スポーツ柔道復活とともに昭和 26 年（1951年）国際柔道連盟（IJF）が発足した。初代会長は当時の講道館長、嘉納履正で、そのリーダー的役割により日本文化として「柔道」が理解された。しかし、英国人パーマーが会長になると柔道そのものが変わった。欧米を中心とするスポーツ感覚は、サッカーに代表されるようにスピード感あふれるものが要求される。それまでの日本的柔道は、静の瞬間が動の瞬間と同様に重要視されていた。この概念が理解されずに現行の柔道に変貌した。審判法では、絶えず攻撃をしなければペナルティーを与える。また、観衆にわかりやすいように判定の基準を従来の「技あり」、「一本」から「技あり」以下の「有効」、「効果」を加えた。結果、現行の柔道のようにポイント柔道へと移行した。

同時に柔道がスポーツとして発展するためには体重制で実施することも不可欠であった。1950年代、この体重別の最初の試合は、米国カリフォルニア州バークレー市の YMCA 体育館で行われた。当時の米国 AAU（Amateur Athletic Union）は、柔道をスポーツ競技として認めるには、レスリング、ボクシング等と同様に体重別にして闘う必要性を提案した。このようにスポーツとしての柔道の体裁を整えつつ現在まで進行した。

このように日本文化の中で発生した柔道は、世界進出しスポーツ化されることにより変貌した。

柔道衣のカラー化（青色）についても、現在の世界柔道の牽引力の強いヨーロッパを中心に、1986年提唱された。

日本を中心に文化的側面からこのカラー化に反対した。しかし、1997年、パリ総会で127対38の賛成多数で翌年の1998年1月から実施される決定をみた。

この結果からもすでに現行の柔道が日本文化から離れた存在であり、スポーツとしての柔道が、ヨーロッパ主流の考え方で進行していることが理解できる。

## 第7回 12月19日

### (1) もう一つの大リーグ

綿田 博人

今年は、大リーグに黒人選手が入団してから半世紀が経った。第一号黒人大リーガーは、当時のブラックリンドジャース（後のロスアンジェルス・ドジャーズ）と契約したジャッキー・ロビンソンであった。今回は、黒人選手が大リーグに入団できると以前から存在していたニグロリーグの変遷について報告してみたいと思う。

1. ニグロリーグとは人種差別の壁のために大リーグには入れない黒人が作ったリーグのことであり、期間は、1898年～1950年までの半世紀である。
2. ベースボールの普及——南北戦争（1861年～1865年）を契機にベースボールがア

アメリカ中に広まった。しかし、黒人は別であった。北部は、1867年に黒人チームを作り、白人チームとエキジビションゲームを行い、1900年前半にニグロ・ナショナルリーグが正式に発足した。これは、黒人の黒人による黒人のための初めてのリーグであり、8チーム加盟し、本拠地は各チームともシカゴ以西であった。次いで1920年代には東部を中心にイースタン・カラードリーグ（6チーム）が発足した。その後幾度かの改革がなされたが、1940年代まで大リーグに劣らない技術と人気を得て、発展していった。

3. ニグロリーグの衰退。大リーグがニグロリーグの中心選手と次々に契約を履行した。（第一号は1946年、ジャッキー・ロビンソンであった。）その結果、大リーグのファーム化になり始めてしまったのが第一の要因であり、第二の要因はテレビの出現であり、その普及率は驚異的であった。大リーグの試合が放映されるようになり、ニグロリーグとともにマイナーリーグも影響を受けた。第三の要因は、他のスポーツの台頭であった。野球よりスピード感のあるバスケットボール、アメリカンフットボール等のプロ化によりニグロリーグは種々の変化を受け、1960年50年間続いた歴史に幕を閉じたのである。

## (2) 平成9年度私立学校施設設備費補助金について

佐々木玲子

昨年申請した平成9年度私立学校施設設備費補助金の交付が正式に内定したことを受け、その申請内容と申請装置について、および最終的な申請にあたっての進捗状況を報告した。

申請装置名は「身体運動解析装置」であり設置場所は、体育研究所3階、測定実験室とするものである。（申請額は61,370,000円）

本装置は、スポーツをはじめとするヒトの動作を測定、記録し、定量的に分析するための一式である。その内訳は、ハイスピードビデオシステム（画像解析）、フォースプレート（力学的解析）、テレメータシステム（生理学的、力学的計測、解析）等で構成され、身体運動を、主として自然科学的アプローチ法により総合的に解析するものである。個々の機器についての簡単な説明と申請段階での設置に関する具体的な提案を行い、納入に関しての現在最終的な検討段階である旨を報告した。また、現時点における機器使用者および研究の事例を呈示するとともに、それ以外でも今後体育研究所内外での有効な使用による研究の促進が望まれる。納期は平成年度中であり、納入を期に現存の機器とともに管理体制を検討することが必要であるとの指摘があった。

## (3) 着衣が水泳に及ぼす影響について

高嶺 隆二

### 1. 目的

近年、水難事故の犠牲者の状況別統計で、水泳中（遊泳中）の場合に比べて通常の着衣状態で水中に転落または入水しその着衣が泳ぐ動作の負担となって落命するケースが多いことに着目して、学校等の水泳授業に「着衣水泳」を取り入れるべきであるという提案がなされるようになって来た。しかしながら、その方法については確立されておらず現場指導者等はそれぞれ工夫をこらしているのが現状である。このことから、本研究は、昨年に引き続き塾大学生の体育履修者に着衣状態での水泳を実施して、着衣が水泳に及ぼす影響について調査、研究を行った。

## 2. 方法

- 実施日 平成9年7月28日 場所 日吉プール
- 被験者 体育実技Ⅱ（シーズンスポーツ）履修学生35名（自由形、平泳ぎで50m以上泳げる者）
- 着衣 長袖のトレーナー、ジーパン、運動靴を着用  
キャップ、ゴーグルは着用せず、髪の毛は束ねない。
- 測定種目 自由形、平泳ぎで50mを泳ぎそれぞれのタイムを記録。
- アンケート 自由形、平泳ぎで50m泳いだことについて種目毎のコメントをとった。
- 手順 (1) 着衣のままプール縁から後ろ向きで水中に落ちる。  
(2) そのまま、その場で5分間水面に留まる。（立ち泳ぎ、背浮き等）  
(3) 2種目の50m泳の測定  
(4) 着衣のまま10分間の連続泳ぎ（スタイル、スピードは自由）

## 3. 結果と考察

35名の50mの測定タイムは次の通り

- 最高タイム 自由形 49秒3 平泳ぎ 54秒1 自由形が4秒8速かった  
最低タイム 自由形 2分28秒2 平泳ぎ 1分42秒1 平泳ぎが46秒1速かった  
平均タイム 自由形 1分29秒3 平泳ぎ 1分12秒0 平泳ぎが17秒3速かった

☆自由形の方が速かった者は6名（17.1%）タイム差は平均6秒2であった。

個人の最高タイムこそ自由形が速かったが、平均タイム、最低タイムは平泳ぎが速く、最高・最低タイム差では自由形1分38.9、平泳ぎ46秒0と着衣が泳ぐスピードに及ばず影響は自由形の方が大きいことを示した。因に、前年に行った25mでの測定では、平均タイム自由形34秒4、平泳ぎ33秒9で、わずかに平泳ぎの方が0秒9速かったが、50mではその差は17秒3に拡がり、距離が伸びると着衣は自由形のほうに大きく影響を及ぼすことを示した。また、泳いだ後のアンケートに示された感想では、圧倒的に平泳ぎのほうが楽だったという意見が多かった。その理由として、腕の動作の違い即ち、腕を水面上に上げて泳ぐ自由形に比べて平泳ぎの場合それが水面下の動作であることが挙げられる。

さらに、着衣水泳の体験の必要性について、大多数の学生が一回は体験すべきであるとの回答であった。

今後の課題としては、学生から「プールのような静水での体験が自然界で果たして役に立つのだろうか？」という疑問も出ており、流れや波に対する対応を如何にするかなどの検討が挙げられる。

## 第8回 1月16日

### (1) 情報理論を用いたゲームの分析——バレーボールをモデルとして—— 山内 賢

今回の研究発表は、でたらめの尺度とよく言われるエントロピーの理論をもちいて、バレーボールの試合の戦術の特徴を数理的に解明することを試みた。試合と数学のモデルには、1995年バレーボールワールドカップにおける上位3チームの試合と情報エントロピーをもちいた。

情報量を試合で用いられる戦術の出現率として求めた情報エントロピーの量とは、以

下のことを意味する。

相手方の特徴に関する情報量が多ければ多いほど相手の特徴は、とらえにくくなる。すなわち、情報量が大であればあるほど、でたらめの尺度は増加するのである。

この関係を利用して、ある条件下における各チームの用いた戦術を情報量として、実際の試合で使用したチームの戦術のでたらめ度を計算し、各チームの特徴として以下に表記してみた。

ある攻撃の条件とは、サーブレシーブからの攻撃（S）、ラリーとしての攻撃（R）、全ての攻撃（S+R=F）、サーブレシーブがうまく処理できた時の攻撃（ABカット）、サーブレシーブがうまく処理できなかったときの攻撃（CFカット）のことである。

#### (結果)

以下のⅠ、Ⅱ、Ⅲの視点における情報エントロピーを求めた。

Ⅰ どこからの攻撃であるのか？

攻撃の情報を、バックアタックのエリア、アタックラインよりネット側での右、中、左の3エリア、合計4エリアに分けて計算した情報エントロピー。

Ⅱ どんな攻撃であるのか？

攻撃の方法を有限化して、計算した情報エントロピー。

Ⅲ 対戦相手別に計算した情報エントロピー。

#### 別表

I	F	S	R	AB	CF
イタリア	1.87	1.75	1.91	1.67	1.81
オランダ	1.92	1.91	1.83	1.9	1.87
ブラジル	1.93	1.94	1.75	1.89	1.83

Ⅱ	F	S	R	AB	CF
イタリア	3.19	3.15	2.73	3.02	2.54
オランダ	3.17	3.08	2.68	2.85	2.59
ブラジル	3.17	3.10	2.72	3.11	2.43

Ⅲ	イタリア	オランダ	ブラジル
イタリア		1.79	1.91
オランダ	1.94		1.90
ブラジル	1.90	1.93	

#### (考察)

Ⅰより、イタリアは、3国中どこからの攻撃なのかが最も明白である。

しかし、攻撃条件をサーブレシーブの時とラリーの時に分類すると、攻撃エリアの選択は、前述の時に単純であるが、後述の時は、何らかの工夫をしているように思われる。オランダとブラジルは、イタリアとは逆の傾向が見られた。世界No1のイタリアは、ラリー時にどこからスパイクを打ってくるのかが要注意のチームであった。

Ⅱより、イタリアの攻撃は、3国中特にバラエティーに富んでいた。攻撃条件別に比較すると、どのチームもサーブプレシーブからの攻撃の時に、攻撃方法の工夫をしている様であった。サーブプレシーブ時もラリー時も情報エントロピーの値は最低であったことより、オランダは、攻撃パターンの単純化の傾向があった。どのチームも、ABカットの方が、CFカットよりも攻撃のバラエティー度が高かった。オランダのABカット、ブラジルのCFカットの数値の低さは、オランダの攻撃パターンの単純化と、ブラジルのCFカット時の攻撃の処理の未熟さを示唆しているように思われる。

Ⅲより、イタリアの対戦相手別に計算した数値には、他の国に比べて差が歴然である。よって、イタリアは、対戦相手によって、戦術を変えてきている可能性がある。

(まとめ)

イタリアがこの大会で世界No1の座を勝ち取ったが、その要因として考えられる特徴は、イタリアが、ラリー時の攻撃エリアの選択とサーブプレシーブの時の攻撃パターンの攻撃に工夫していることと、対戦相手によって戦術を変えてきている可能性であろう。

## (2) ダンスの指導の問題点

篠原しげ子

秋学期の13回の授業でブルース、ワルツ、タンゴの3種類を実施した。教員により、動きと言葉による説明の繰り返し、手本としてのビデオ鑑賞などにより、イメージを持たせた。この授業の主目的である正しい姿勢の保持が困難であり、特に、頭の位置のずれが目立った。各自の問題点を気づかせるために、ビデオ撮影により、自分の実際の姿をチェックすることで、問題箇所の修整を計った。その折りに、チェックポイントを10項目用意し、各項目について○×△の3段階で自己評価した。これを基に自分の動きを修整すべく練習し、さらに、再度撮影、評価を繰り返した。姿勢に関しては、一本軸が通るようになったが、頭が前に傾斜する難点の修整は相当に時間を要すると思われる(目線が下向きのこと、首の筋力の弱さが一因であろう)。

## (3) 日本スポーツ界におけるドーピング(アンチ・ドーピング)の現状 松田 雅之

19世紀後半から始まったといわれるドーピングは、1950年代から1960年代まで広く行われるようになり、ローマ・オリンピックではアンフェタミン(覚醒アミン)を使用した自転車ロード選手の死亡事故が起こった。このようなドーピングの広がり、それによる選手の死亡事故や健康障害の多発に対して、ヨーロッパを中心にドーピング規制は高まり、1968年の冬季・夏期オリンピック大会からドーピングコントロール(ドーピング検査)が実施されるようになった。以来、ドーピング・コントロールによって数多くの失格者、出場停止者、永久追放者が出たが、1988年ソウル・オリンピックでのベン・ジョンソンの事件は世界中の人々のドーピングに対する関心を一気に高めたといえる。

日本におけるドーピング事例は、過去20年間でも十数例しかなく、世界のドーピング事例から見ればとてもわずかである。しかし、1996年の陸上競技選手の競技外ドーピングコントロール(抜き打ち検査)における、タンパク同化剤による4年間の資格停止処分は、我が国初めてのステロイド系の陽性者であるというばかりでなく、不注意による陽性者ではなかったという点において重要な意味を持つこととなった。

このことは、日本スポーツ界にも、ドーピングが対岸の火事ではないことを示した。そ

して1996年7月に、日本でもようやくアンチ・ドーピングに対する競技会が発足された。1998年には、水泳や陸上などのように、大学レベルの競技会においてもドーピングコントロールが実施されたり、アンチドーピングに関する資料が各大学に配布されるようになってきた。カナダやドイツなどのような確立したアンチ・ドーピングシステムが浸透していない日本のスポーツ選手やスポーツ指導者にとって今後必要なことは、遅ればせながら広がりつつあるアンチ・ドーピングを、どのような形でスポーツ教育の中に取り入れてゆくかではないかと思われる。

## 5. 体育研究所プロジェクト研究について

### 「体育研究所共同研究プロジェクト中間報告内容」

#### 大テーマ「21世紀のスポーツ・健康教育——慶應義塾を発信源として——」

#### 第1グループ（今後のスポーツ・健康教育の役割人文・社会学的アプローチ）

##### <歴史部門>

班員 綿田 博人、

体育史を戦前、戦後に分け、慶應義塾の体育の変遷を年表、その他の資料において調べて整理し、今年度末には、慶應義塾体育史の資料となるように完成させる意向である。

##### <アンケート調査部門>

班員 近藤明彦、植田史生、佐々木玲子、山内賢、村山光義、上向貫志、田中伸明

平成8年12月より検討を重ねた結果、アンケート調査によるスポーツ・運動活動にたいする意識調査を行うこととなった。質問紙の内容としては、1. 現在までの運動実施状況についてのフェイスシート部分。2. スポーツ活動に関する意識調査。3. 体育実技履修者に対する意識調査の3種類の内容について作成した。

塾全体よりランダムにザンプリングされた3500名に対して、平成9年7月から8月にかけて郵送による方法でアンケート調査を実施した結果、1051名からの回答を得た。

運動実施状況に関する調査結果については、「慶應義塾大学塾生の運動実施に関する実態調査——体育実技非履修者を含む全学年の調査から——」として植田史生、佐々木玲子、村山光義、田中伸明上向貫志が平成10年1月発行の体育研究所紀要第37巻に掲載した。

#### 第2グループ（自然科学的立場から見た健康問題）

班員 今栄貞吉、安藤勝英、近藤明彦、植田史生、佐々木玲子、山内賢、村山光義、上向貫志、田中伸明

1) 身体的、精神的、社会的健康度、QOL、ストレス度等の評価をするための基礎的研究として、質問紙法によって調査を行い、健康関連体力の得点と健康診断の得点との関係および健康診断得点の経時的変化について検討を行った。

上記の研究結果は、論文名「質問紙による健康評価の経時的変化および健康関連体力との関係」として体育研究所紀要に掲載した。

2) 体脂肪の評価法として、インピーダンス法（BI法）と超音波Bモード法の2種類の測定方法を用いて同一被検者の体脂肪率の値の違い、その傾向等の比較検討を行った。上記の研究結果は、論文名「異なる測定方法による体脂肪測定推定値の比較——健康関連体力測定項目としての観点から——」として体育研究所紀要に掲載した。

#### 第3グループ（スポーツ・健康教育の実践的研究）

##### <スポーツ教育のケーススタディ——野外教育の実践——>

吉田泰将、佐々木玲子、村山義光、田中伸明、野口和行

本プロジェクトは、スポーツ教育のケーススタディとして、シーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」を取り上げ、授業実施による様々な効果の測定を目的としている。

その手始めとして、平成8年度アウトドアレクリエーション履修者を対象に、学生による授業評価の研究を行った。結果は、平成8年度スポーツ教育学会において口頭発表し、体育研究所第36巻に掲載した。

今後は、授業実施による自己概念の変化や自然に対する認識の変化、余暇に対する意識の変化等について研究を続けていきたい。さらに、授業評価についても質問項目の精選、実施プログラムの違いによる変化等について検討していきたい。

#### <動作解析の教育的フィードバックシステム>

班員 山内 賢、吉田泰将

本年度は、具体的な研究報告は無し。しかし、平成10年度には、文部省からの大型研究補助金を基にして、NECメディカルシステムズ製の身体運動解析装置を購入することが出来るようになった。内容は、1) ハイスピードビデオ（ナック社製）、2) フォースプレート、3) 多用途テレメータである。

1) については、ハイスピードカメラが2台と撮影専用照明4台により、自動追跡テータ取り込み式で2次元の身体運動の解析が可能となるシステムである。

2) については、フォースプレート（400×600mm）2台を体育研究所室内の床に埋め込むことにより、運動者の歩行、走行時の床反力や身体荷重の様相を求めることが出来るシステムである。

3) については、筋電図、心電図、眼球運動、呼吸曲線、運動中の関節角度変化などを計測するシステムである。

この画期的システムを利用して、平成10年度以降は、スポーツ活動の実践的研究についての様々な研究報告を行う。

#### <スポーツ場面の心理的アプローチ>

班員 上向貫志・田中伸明

「スポーツ場面の心理的アプローチ」では、平成8年度に研究計画を立案し、平成9年度調査実施の予定であったが、予備調査等の関係上平成9年度に本調査を実施する運びとなった。本グループにおける研究の特性として、基礎研究というよりむしろ実践・応用的研究といったダイレクトに現場に寄与すべきものであると考える。

本研究では大学スポーツ選手の心理的競技能力を測定することが第一の目的である。その用いられる測定用具である「心理的競技能力診断検査」とは、スポーツ選手に必要な心理的競技能力を、①競技意欲、②精神の安定・集中、③自信、④作戦能力、⑤協調性といった5因子にまとめ、診断テストとして標準化されたものである。この「心理的競技能力診断検査」は、実施から得点化、プロフィール診断まで開発されており、選手個々の特性的な心理的競技能力の把握、さらには強化が必要とされる心理的側面を明らかにすることが可能であるとされている。

したがって、本調査で用いる「心理的競技能力診断検査」をただ単に用いるのではなく、身体的（体力的）要因、技術的要因との関連から心理状態を把握し、現場にフィードバック可能な有益な情報を探るのが望ましいと思われる。そういった観点から「心理的競技能力診断検査」に加え、付随してどのような情報を収集し、各要因間の関連を検討するための予備調査を行ってきた。

それらをもとに、平成10年度では4～5月中に調査を実施し、その後処理を行なう。なお、独立変数として、球技（野球・サッカー・バレー・バスケット・ラグビー・アメリカンフットボール）、武道（剣道・合気道・空手・相撲）、個人種目（陸上競技・テニス・バドミントン・スキー）といった変数の統制を行ない、調査を実施する予定である。また、

分析後は、調査の協力を得た各体育会、及び選手個人へのフィードバック、さらには要請のある選手への個別対応も行なう予定である。

<競技力向上のためのスポーツ教育>

班員 松田雅之、吉田泰将、村山光義

来年度に向け、体育会部員対象の体力測定実施に伴い、以下のような計画を検討してゆく。

体育会部員、サークル活動等において、トレーニング処方、リハビリ、怪我の予防、マッサージ、テーピングなどの講習ならびにコントロールテスト等を実施し、競技力向上（フィジカル面、メンタル面、スキル面、etc …）に役立つトレーニング処方を行う。

<体育会部員対象の体力測定>

班員 松田雅之、吉田泰将、石手 靖

平成10年度実施に向けて体育会部員対象の体力測定内容を検討中（詳しくは、7月定例研究会の吉田泰将の内容を参考）。

また、大学以外の諸学校の体力レベル向上についても考えてゆきたい。広く慶應義塾を対象とした場合には、教職員・通信学部へのアプローチをする。



## 第2部 教育分野

### 概 要

体育研究所では文学部、経済学部、法学部、商学部、医学部、理工学部の学生を対象に、実技科目(体育実技Ⅰ、体育実技Ⅱ)と講義科目(保健衛生、体育理論)を、また通信教育部の夏季スクーリングでの体育実技と体育理論を開設している。

本研究所では大学設置基準の変更に伴う保健体育科目の選択制が実施されて以来、より学生のニーズにそったアトラクティブな授業の展開を目指してきたが、現在体育実技Ⅰ(ウィークリースポーツ)では週に150コマを越える授業を展開することによってひとつの答えを見いだそうとしてきた。また体育実技Ⅱ(シーズンスポーツ)では体育会各部OB会にも指導員の派遣を依頼し、その助力のもと39種目にも及ぶ授業の展開をしている。

新カリキュラム導入後5年間を通じて、毎年延べ10,000名近くの学生が体育実技及び講義を履修している。履修者数については今後、開講種目の増設や削減により多少の変動はみられるが、一つの方向性が見出せたものと思われる。

体育実技Ⅱ(シーズンスポーツ)に関しては、実施時期や実施種目等の変更を含めた、より積極的な改革を目指した討論を重ねてきたが、本年度は、スキー、スケートの冬季合宿種目へ体育研究所専任所員が派遣され、指導スタッフとしても活動した。また、ヨット、テニス、山岳などの合宿種目においても、体育研究所所員が実際に現地に赴き、より合理的な実施方法を模索すべく、実技指導員と意見交換を重ねた。

また、本年度より体育研究所独自の方法で履修追加登録を行った。今後もこのシステムを発展、継続させることで履修登録時に希望種目から抽選洩れしてしまった学生にも、より多くの選択肢を提示出来るよう検討していきたい。

授業評価については、3年間におけるアンケート調査によって学生の体育実技に対するニーズや、施設、用具、授業内容、担当教員への評価など、一応の結果が得られているが、アンケート結果がより授業内容の向上にいかされるためには、アンケートの質問項目等の検討が必要であろう。



## 1. 平成9年度カリキュラム概要と履修統計

### 1) 各学部対象の保健体育科目

#### (1) 体育実技

平成9年度は、各学部対象の授業として、ウィークリースポーツ(体育実技Ⅰ)を26種目308コマ、シーズンスポーツ(体育実技Ⅱ)を39種目39コマ開講した。体育実技Ⅰの担当者と担当種目は表1-1の通りであり、学生の種目別履修状況は、表1-2に示す通りである。また、体育実技Ⅱの担当者、担当種目、学生の履修状況は表1-3のようになっている。

体育実技Ⅰでは体育研究所側で提示した9,177名の総定員に対して、7,368名の履修者(充足率80%)となっており、また、体育実技Ⅱでは、2,100名の総定員に対して、1,845名の履修者(充足率88%)となっている。しかし、種目、曜日時限別に見た場合、充足率にはばらつきがあり、今後より一層学生のニーズに応えられるよう、開講種目、開講時間の検討を進めていきたい。

学部別の体育実技履修者数は表1-4のようになっている。体育実技履修者の殆どは、日吉地区在籍者である。また、体育実技履修者は平均して1.9コマ実技科目を履修している(延履修者9,194名に対して、実履修者4,725名)。尚、医学部では保健体育科目を卒業単位として認めていないので、他学部と比べ学部在籍者に対する実技履修者数および履修者の平均履修コマ数とも極端に少なくなっている。

#### (2) 講義科目

講義科目のテーマ、担当者は表1-5のようになっている。半期講義科目で1単位としてしか換算されないという新カリキュラム施行以来の問題点を抱えているとはいえ、より多くの受講者を確保すべく、さらなる内容の充実を図っていきたいと考えている。

表 1-1 平成 9 年度 体育実技 I (ウィークリースポーツクラス) 種目別履修状況一覧

	担当者	種目
教 授	橋本 治雄	ゴルフ
教 授	今栄 貞吉	体力 UP コース
教 授	高嶺 隆二	水泳、体力 UP コース
教 授	近藤 明彦	陸上競技、ジョギング、テニス
教 授	安藤 勝英	柔道
助 教 授	篠原しげ子	ダンス
助 教 授	植田 史生	剣道、ソフトボール、卓球
助 教 授	綿田 博人	野球、ゴルフ
助 教 授	松田 雅之	陸上競技、ジョギング、体力UPコース、ニュースポーツ、卓球
助 教 授	佐々木玲子	エアロビクス、インドアスポーツ、テニス、バスケットボール
専任講師	石手 靖	バレーボール
専任講師	山内 賢	ハンドボール、バスケットボール、インドアスポーツ、ニュースポーツ、体力UPコース
専任講師	吉田 泰将	剣道、体力UPコース、ソフトボール
専任講師	加藤 大仁	バスケットボール、インドアスポーツ
助 手	村山 光義	バレーボール、テニス、インドアスポーツ
助 手	野口 和行	ニュースポーツ、バスケットボール、バレーボール
助手(嘱託)	上向 貫志	サッカー
助手(嘱託)	田中 伸明	テニス
助手(嘱託)	小森 康加	エアロビクス、水泳、
助手(嘱託)	佐藤 正伸	ソフトボール、バレーボール
非常勤講師	青樹 茂彰	ホッケー
非常勤講師	稲田 周平	合気道
非常勤講師	奥村 吾子	ソフトボール
非常勤講師	勝又 宏	野球、ソフトボール
非常勤講師	加藤 幸司	バドミントン
非常勤講師	木塚 孝幸	バスケットボール
非常勤講師	後藤 完夫	アメリカンタッチフットボール
非常勤講師	白井 巧	バドミントン、インドアスポーツ
非常勤講師	鈴木 智子	エアロビクス
非常勤講師	須田 芳正	サッカー
非常勤講師	砂押 雅夫	ボクシング
非常勤講師	高橋 宏文	バレーボール
非常勤講師	手島智佳子	テニス
非常勤講師	内藤 尚男	ソフトテニス
非常勤講師	早川 靖彦	ラクロス
非常勤講師	平井 克英	バドミントン
非常勤講師	堀場 雅彦	テニス
非常勤講師	松本 潔	卓球
非常勤講師	村上 博之	弓術
非常勤講師	湯田 秀行	サッカー

表1-2 平成9年度 体育実技I (ウィークリースポーツクラス) 種目別履修一覧

地区	種 目	コ マ 数		計	定 員	登録倍率	履 修 数	充 足 率
		春 学 期	秋 学 期					
日 吉 地 区 開 設	合 気 道	1	1	2	80	0.85	71	89%
	アメリカンタッチ	1	1	2	60	0.97	62	103%
	インドアスポーツ	1	2	3	210	0.30	84	40%
	エアロビクス	7	9	16	400	0.68	283	71%
	剣 道	4	4	8	240	0.28	76	32%
	ゴ ル フ	6	7	13	285	1.95	298	105%
	サ ッ カ ー	12	12	24	920	0.97	829	90%
	柔 道	3	3	6	180	0.47	94	52%
	ジ ョ ギ ン グ	2	2	4	120	0.68	87	73%
	水 泳	10	1	11	330	0.69	233	71%
	ソフトテニス	2	2	4	80	0.42	52	65%
	ソフトボール	11	11	22	768	1.04	665	87%
	体 力 U P	8	9	17	390	0.86	340	87%
	卓 球	6	6	12	340	1.00	288	85%
	ダ ン ス	4	4	8	160	1.11	161	101%
	テ ニ ス	14	14	28	652	1.39	532	82%
	ニュースポーツ	4	4	8	320	0.41	205	64%
	バスケットボール	14	13	27	960	1.08	886	92%
	バドミントン	6	6	12	400	1.03	414	104%
	バレーボール	12	12	24	800	0.74	562	70%
	ハンドボール	2	1	3	120	0.38	59	49%
	ボクシング	1	1	2	60	1.05	60	100%
	ホ ッ ケ ー	1	1	2	80	0.65	56	70%
	野 球	4	4	8	200	0.90	197	99%
ラクロス	2	2	4	160	0.65	123	77%	
陸上競技	2	2	4	120	0.47	63	53%	
日吉合計	140	134	274	8435	0.91	6780	80%	
三 田 地 区 開 設	合 気 道	1	1	2	30	1.03	26	87%
	弓 術	2	2	4	80	1.14	77	96%
	剣 道	2	2	4	120	0.37	45	38%
	柔 道	2	2	4	120	0.37	47	39%
	ダ ン ス	1	1	2	60	1.50	89	148%
	テ ニ ス	5	5	10	132	1.98	124	94%
	バレーボール	4	4	8	200	0.92	180	90%
三田合計	17	17	34	742	1.00	588	79%	
合 計	157	151	308	9177	0.91	7368	80%	

表 1-3 平成 9 年度 体育実技 II (シーズンスポーツクラス) 指導員及び履修状況一覧

種目	指 導 員	定 員	倍 率	実履修数	充 足 率
春学期 7月 アウトドアレクリエーション	吉田 泰将	50	2.52	54	108%
春学期 7月 アメリカンタッチフットボール	高木 晴彦	40	1.05	41	103%
春学期 7月 ウェイトリフティング	関司 翔一	10	0.80	10	100%
春学期 7月 空 手	蓮池敬一郎	40	0.78	33	83%
春学期 7月 弓 術	吉岡 實	75	1.01	82	109%
春学期 7月 剣 道	清水 誠治	30	0.37	14	47%
春学期 7月 硬式野球	後藤 寿彦	40	0.88	37	93%
春学期 7月 サッカー	小森 秀二	50	1.24	55	110%
春学期 7月 自 動 車	松山 保幸	70	0.76	68	97%
春学期 7月 柔 道	安藤 勝英	30	0.43	14	47%
春学期 7月 小林寺拳法	中島 正樹	20	1.35	27	135%
春学期 7月 水 泳	伊藤 基孝	150	0.51	83	55%
春学期 7月 相 撲	桃沢 庸介	5	2.00	10	200%
春学期 7月 ソフトボール	綿田 博人	40	1.22	49	123%
春学期 7月 卓 球	古谷 修一	100	0.55	64	64%
春学期 7月 軟式野球	丸井徳三朗	50	0.86	55	110%
春学期 7月 馬 術	横山 武次	45	2.18	47	104%
春学期 7月 バスケットボール	吉川 政宏	75	0.84	73	97%
春学期 7月 バドミントン	吉田 格磨	100	0.85	96	96%
春学期 7月 バレーボール	竹内 正和	100	0.61	71	71%
春学期 7月 ホッケー	青樹 茂彰	40	0.70	28	70%
春学期 7月 ヨット	斎藤 渉	50	0.82	53	106%
春学期 7月 ラグビー	小野寺 孝	35	0.77	32	91%
春学期 7月 陸上競技	松田 雅之	30	0.40	15	50%
春学期 7月 フェンシング	田中由美子	20	0.55	12	60%
春学期 7月 ボクシング	砂押 雅夫	30	0.83	26	87%
秋学期 9月 アーチェリー	畠山雅一朗	40	1.82	43	108%
秋学期 9月 合 気 道	岡部 英紀	40	1.30	44	110%
秋学期 9月 器械体操	宮崎 正己	50	0.48	25	50%
秋学期 9月 ゴ ル フ	村山 雅春	60	1.90	66	110%
秋学期 9月 山 岳	岩水 治朗	60	0.65	49	82%
秋学期 9月 新 体 操	宮崎 正己	30	0.40	18	60%
秋学期 9月 ソフトテニス	桑野 正位	50	0.58	45	90%
秋学期 9月 端 艇	高橋 一栄	50	0.18	14	28%
秋学期 9月 テ ニ ス	堀場 雅彦	80	1.09	85	106%
秋学期 9月 ハンドボール	上原 雅敏	40	0.65	29	73%
秋学期 9月 レスリング	伊藤 勉	15	0.53	10	67%
秋学期 2月 ス キ ー	吉田 久夫	200	1.10	215	108%
秋学期 2月 スケート	福水 由男	60	0.68	53	88%
合計 40 コマ		2100	0.91	1845	88%

表 1-4 平成 9 年度 学部別体育実技履修状況一覧

	履修科目数	1年 (女子)		2年 (女子)		3年 (女子)		4年 (女子)		合計 (女子)		延履修数 (女子)	
全学部 (文・経・ 法・商・ 医・理)	1	790	200	594	150	156	58	123	47	1663	455	1663	455
	2	1420	371	673	119	135	36	71	23	2299	549	4598	1098
	3	162	37	144	24	26	7	20	9	352	77	1056	231
	4	145	39	125	13	10		16	3	296	55	1184	220
	5	16	3	27	4	4		3		50	7	250	35
	6	14	2	19	4	1		1		35	6	210	36
	7	6	1	6	1	2		2		16	2	112	14
	8	5	1	3						8	1	64	8
	9			2				1		3		27	
	10以上	1	1			1		1		3	1	30	10
	履修者合計	2559	655	1593	315	335	101	238	82	4725	1153	9194	2107
	在籍者数	6141	1540	5833	1498	5693	1501	5802	1437	23668	6002		
	履修者割合	42%	43%	27%	21%	6%	7%	4%	6%	20%	19%		

文学部	1	158	96	69	48	46	26	23	17	296	187	296	187
	2	299	189	24	8	22	14	21	13	366	224	732	448
	3	33	17	1	1	6	2	3	3	43	23	129	69
	4	38	21	1	1	1		1		41	22	164	88
	5	1		1	1					2	1	10	5
	6	1								1		6	
	7												
	8												
	9												
	10以上												
	合計	530	323	96	59	75	42	48	33	749	457	1337	797
	在籍者数	967	575	1044	617	956	528	972	578	3939	2298		
	履修者割合	55%	56%	9%	10%	8%	8%	5%	6%	19%	20%		

経済学部	1	124	13	88	9	35	12	29	6	276	40	276	40
	2	262	34	195	24	62	10	26	2	535	70	1070	140
	3	22	3	37	3	5	1	7	1	71	8	213	24
	4	27	4	40	6	5		4		76	10	304	40
	5			3		1				4		20	
	6	1	1	5	1	1				7	2	42	12
	7							1		1		7	
	8												
	9												
	10以上												
	合計	436	55	368	43	109	23	57	9	970	130	1932	256
	在籍者数	1359	143	1270	175	1232	202	1263	123	5124	643		
	履修者割合	32%	56%	29%	25%	9%	11%	5%	7%	19%	20%		

	履修科目数	1年 (女子)		2年 (女子)		3年 (女子)		4年 (女子)		合計 (女子)		延履修数 (女子)	
法学部 (法律)	1	31	10	37	14	6	2	26	12	100	38	100	38
	2	160	34	108	29	13	3	16	5	297	71	594	142
	3	18	4	18	7	3	1	4		43	12	129	36
	4	34	3	27	4	1		5	3	67	10	268	40
	5	1	1	6	2	2		1		10	3	50	15
	6	2		4						6		36	
	7	1	1							1	1	7	7
	8	1								1		8	
	9			1				1		2		18	
	10以上					1				1		10	
合計	248	53	201	56	26	6	53	20	528	135	1220	278	
法学部 (政治)	1	83	35	86	28	30	8	23	7	222	78	222	78
	2	136	42	73	19	14	7	8	2	231	70	462	140
	3	34	11	30	4	7	3	5	5	76	23	228	69
	4	26	9	21	1	3		3		53	10	212	40
	5	11	2	13	1	1				25	3	125	15
	6	7	1	5	2			1		13	3	78	18
	7	5		4		1		1		11		77	
	8	4	1	1						5	1	40	8
	9			1						1		9	
	10以上	1	1					1		2	1	20	10
合計	307	102	234	55	56	18	42	14	639	189	1473	378	
法学部合計	555	155	435	111	82	24	95	34	1167	324	2693	656	
在籍者数	1352	467	1217	373	1311	427	1337	404	5217	1671			
履修者割合	41%	33%	36%	30%	6%	6%	7%	8%	22%	19%			

商学部	1	93	17	119	25	19	7	13	3	244	52	244	52
	2	243	31	164	29	17	1	7	1	431	62	862	124
	3	4		32	6	1				37	6	111	18
	4	9	1	26	1			3		38	2	152	8
	5			1				1		2		10	
	6	1								1		6	
	7												
	8												
	9												
	10以上												
合計	350	49	342	61	37	8	24	4	753	122	1385	202	
在籍者数	1118	196	1070	170	1019	177	1111	180	4318	723			
履修者割合	31%	25%	32%	36%	4%	5%	2%	2%	17%	17%			

	履修科目数	1年 (女子)		2年 (女子)		3年 (女子)		4年 (女子)		合計 (女子)		延履修数 (女子)	
医学部	1	3		4						7	0	7	
	2	2	1	1						3	1	6	2
	3	1								1		3	
	4												
	5												
	6												
	7												
	8												
	9												
	10以上												
	合計	6	1	5	0					11	1	16	2
	在籍者数	103	21	103	14					206	35		
	履修者割合	6%	5%	5%	0%					5%	3%		

理工学部	1	298	29	191	26	20	3	9	2	518	60	518	60
	2	318	40	108	10	7	1	3		436	51	872	102
	3	50	2	26	3	4		1		81	5	243	15
	4	11	1	10						21	1	84	4
	5	3		3				1		7		35	
	6	2		5	1					7	1	42	6
	7			2	1	1				3	1	21	7
	8			2						2		16	
	9												
	10以上												
	合計	682	72	347	41	32	4	14	2	1075	119	1831	194
	在籍者数	1243	138	1129	149	1079	151	1013	132	4463	570		
	履修者割合	55%	52%	31%	28%	3%	3%	1%	2%	24%	21%		

表 1-5 講義科目テーマおよび担当者

体育理論 (スポーツサイエンス)				
講 義 テ ー マ	コ マ 数		担 当 教 員	履 修 者 数
	春	秋 合 計		
競技スポーツにおけるメンタル・マネージメント	1	1	近藤明彦・上向貫志・田中伸明	23
文化としてのスポーツ論	1	1	綿田博人・松田雅之・植田史生	8
スポーツ上達の基礎知識	1	1	植田史生・石手 靖・村山光義	6
アスリートのためのスポーツ医・科学	1	1	近藤明彦・佐々木玲子・大西祥平 (スポーツ医学研究センター)	32
アウトドアレクリエーションへの招待	1	1	村山光義・野口和行	13
ライフセービング	1	1	山内 賢	28
スポーツと身体(からだ)基礎理論	1	1	吉田泰将	39
スポーツ・身体活動の社会科学	1	1	近藤明彦・加藤大仁・野口和行	18
健康・体力へのアプローチ	1	1	今栄貞吉・安藤勝英・山内 賢	19
スポーツ心理学における俗説と心理	1	1	近藤明彦	27
身体運動の科学	1	1	佐々木玲子	13
スポーツと法	1	1	高嶺隆二	10

保健衛生 (ヘルスサイエンス)				
講 義 テ ー マ	コ マ 数		担 当 教 員	履 修 者 数
	春	秋 合 計		
心臓病の基礎知識	1	1 2	和井内由充子 (保健管理センター)	8
遺伝、環境と現代病	1	1 2	南里清一郎 (保健管理センター)	13
ライフスタイルと成人病	1	1 2	齋藤郁夫 (保健管理センター)	13
現代病の知識と予防	1	1 2	河邊博史 (保健管理センター)	4
病気の予防とライフスタイル	1	1 2	辻岡三南子 (保健管理センター)	26
医学概論	2	2 4	橋本治雄	62
親準備学	1	1 2	木村慶子 (保健管理センター)	32
健康管理入門	1	1 2	吉田 正 (保健管理センター)	25

## 2) 通信教育部関係保健体育科目

### (1) 体育実技スクーリング

表 1-6 の通り、14 種目の授業を夏期スクーリング第Ⅱ期 (8月1日(金)～8日(金)) の日曜を除く7日間) 期間中に実施した。授業時間は 13:45～16:00 の酷暑の時間帯であり、場所は日吉地区各体育施設である。

学生は、健康診断書の提出・履修仮登録申し込みを行い、6月の仮登録許可・不許可の通知に従い出席申し込みを行う。仮登録の申し込みは、第一希望から第三希望まで希望順位欄に記入でき、不許可者の減少を図っている。体育実技は2単位履修となっており、1単位履修はできない。特別課程入学者も同様である (学士入学者は履修できない)。受講料納入後登録が完了する。その後、スクーリング受講票に選択し確定した種目が記載されることとなっている。

学生は希望種目を履修しているので、猛暑の時間帯にもかかわらず、意欲的に授業に取り組んでいる。

(2) 総合教育科目 保健体育科目 体育理論

体育理論も実技と同様に、夏期スクーリング第Ⅱ期期間中の7日間行われた。100分間の授業を受講し、テストに合格することにより1単位が認定される。昨年同様、本年度も4名の教員によるオムニバス形式で講義が展開され、「健康・体力へのアプローチ」「スポーツ・身体活動の科学的基礎」「スポーツとオリンピック」「女性とスポーツ」と多彩なテーマで学生の知的興味をそそる内容となった。授業後の質問も活発に行われていた。

表1-6 体育実技

種目名	担当教員	総定員	履修者	充足率
剣道	植田史生・吉田泰将	30	14	46.7
柔道	安藤勝英	30	6	20
陸上競技	近藤明彦	30	9	30
レジャースポーツ	野口和行・佐藤正伸	80	43	53.8
バスケットボール	山内 賢	75	40	53.3
バレーボール	村山光義・上向貫志	50	36	72
ゴルフ	村山雅春	40	36	90
エアロビクス	佐々木玲子	60	58	96.7
ボールルームダンス	篠原しげ子	40	36	90
キャリスセニックス	今米貞吉	20	18	90
卓球	松田雅之	30	25	83.3
水泳	高嶺隆二・小森康加	80	66	82.5
バドミントン	田中伸明	30	25	83.3
ソフトボール	綿田博人	40	36	90
	合計	635	448	70.6

体育理論

テーマ	担当教員
健康・体力へのアプローチ	今米 貞吉
スポーツ・身体活動の科学的基礎	近藤 明彦
スポーツとオリンピック	松田 雅之
女性とスポーツ	篠原しげ子

## 2. 平成9年度スポーツクラス履修者アンケート集計結果

平成9年度も平成8年度同様、体育実技履修者へのアンケート調査として、春・秋学期のウィークリースポーツクラス、シーズンスポーツクラスの各々について、同一内容のものを実施し、それぞれ集計し随時報告した。

以下は、それら3つについてまとめ、再編成して示したものである。

尚、各表中の、「春I」は春学期ウィークリースポーツ、「秋I」は秋学期ウィークリースポーツ、「シーズン」はシーズンスポーツを示す。

### 1) アンケート回答者の基礎的データ

アンケートは学生による授業の評価であり、各種目の各授業ごとに実施された。従ってここでは、個人が複数回アンケートに回答したものが含まれる。そこで、回答者の基礎データ集計のために、回答回数をチェックし、回答者実数を出した(表2-1)。以下、授業評価項目以外については、表2-1の実数が対象となっている。表2-2、2-3、2-4はそれぞれ、学部別、男女別、学年別のアンケート回答者数の一覧である。ウィークリーとシーズンでは学部間の比率に違いがみられた。シーズンでは理工学部が特に比率が高く、ウィークリーでは平均して経済学部、次いで理工学部が高かった。学年別にみると、1、2年生が大半を占め、特に理工学部でそれが著しい。文、経済学部では3年生の比率が高く、4年生は法学部で高い。表5は昨年度以前の体育実技の履修の有無について、「履修した」者の数を学部別に示した。全回答者の3割弱に履修歴があった。

表2-1 アンケート回答者数

	春 I	秋 I	シーズン	総和(延べ数)
総 数	2282	1624	996	4902
実数(集計対象)	1813	1149	793	3755
複数回答	212	247	143	602
回答回数未記入	257	228	60	545

表2-2 学部別アンケート回答者数(総和)

実施時期	全体	文	経済	法(政)	法(法)	商	医	理工
春 I	1813	302	364	236	238	279	4	390
		16.7%	20.1%	13.0%	13.1%	15.4%	0.2%	21.5%
秋 I	1149	156	244	168	200	178	2	201
		13.6%	21.2%	14.6%	17.4%	15.5%	0.2%	17.5%
シーズン	793	121	107	93	51	85	2	333
		15.3%	13.5%	11.7%	6.4%	10.7%	0.3%	42.0%

表 2-4 学部別アンケート回答者数 (学年)

	学年	文	経済	法(政)	法(法)	商	医	理工	計	学年比
春 I	1	268 23.1%	195 16.8%	136 11.7%	129 11.1%	151 13.0%	2 0.2%	280 24.1%	1362	64.1%
秋 I	1	142 21.1%	104 15.5%	91 13.5%	102 15.2%	95 14.1%	2 0.3%	136 20.2%	672	58.5%
シーズン	1	79 15.8%	48 9.6%	65 13.0%	18 3.6%	45 9.0%	2 0.4%	243 48.6%	500	63.4%
春 I	2	13 2.3%	145 25.8%	81 14.4%	102 18.2%	118 21.0%	2 0.4%	100 17.8%	561	31.0%
秋 I	2	3 0.8%	113 29.1%	63 16.2%	75 19.3%	76 19.6%	0 0.0%	58 14.9%	388	33.8%
シーズン	2	27 11.7%	49 21.2%	20 8.7%	24 10.4%	31 13.4%	0 0.0%	80 34.6%	231	29.3%
春 I	3	17 25.0%	22 32.4%	13 19.1%	3 4.4%	9 13.2%	0 0.0%	4 5.9%	68	3.8%
秋 I	3	4 10.8%	15 40.5%	6 16.2%	7 18.9%	2 5.4%	0 0.0%	3 8.1%	37	3.2%
シーズン	3	12 26.7%	6 13.3%	6 13.3%	5 11.1%	7 15.6%	0 0.0%	9 20.0%	45	5.7%
春 I	4	3 15.0%	2 10.0%	6 30.0%	4 20.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 25.0%	20	1.1%
秋 I	4	7 14.6%	12 25.0%	7 14.6%	16 33.3%	5 10.4%	0 0.0%	1 2.1%	48	4.2%
シーズン	4	2 15.4%	3 23.1%	2 15.4%	3 23.1%	2 15.4%	0 0.0%	1 7.7%	13	1.6%

表 2-5 昨年度以前の体育実技履修者数

	履修	文	経済	法(政)	法(法)	商	医	理工	計	比率
春 I	有り	23 5.6%	106 25.7%	70 17.0%	61 14.8%	75 18.2%	1 0.2%	76 18.4%	412	30.1%
秋 I	有り	15 4.5%	91 27.4%	51 15.4%	68 20.5%	51 15.4%	0 0.0%	56 16.9%	332	28.9%
シーズン	有り	18 10.3%	29 16.6%	14 8.0%	23 13.1%	21 12.0%	2 1.1%	68 38.9%	175	22.1%

2) 運動の実施状況について

学生の運動活動について、体育実技以外の日常的運動習慣の有無を尋ねた。表 2-6 は、体育実技以外での運動実施者数、表 7 はその実施形態と頻度を示している。運動実施者数は全体の 6 割を超え、女子に比べ男子がやや多かった。また、実施形態は、約 7 割が「サー

クル」であり、その頻度は週1、2回が多く、両者で全体の5割以上を占めた。この頻度には男女差はなかった。

表2-6 体育実技以外での運動実施者数（実数及び総回答者に占める割合）

春 I			秋 I			シーズン		
総数	男子	女子	総数	男子	女子	総数	男子	女子
1119	864	255	620	472	148	482	348	134
61.7%	63.4%	56.9%	54.0%	57.6%	45.1%	60.8%	62.8%	57.3%
学年	総 数		学年	総 数		学年	総 数	
1	719	61.9%	1	342	50.8%	1	324	64.8
2	340	60.6%	2	227	58.5%	2	122	52.8
3	48	70.6%	3	23	62.2%	3	28	62.2
4	12	60.0%	4	26	54.2%	4	8	61.5

表 2-7 運動実施形態及び実施頻度

	春 I		秋 I		シーズン	
サークル	891	79.0%	474	73.8%	334	69.2%
地域クラブ	25	2.2%	32	5.0%	21	4.3%
体育会	84	7.4%	51	7.9%	63	13.0%
その他	128	11.3%	85	13.2%	65	13.5%
計	1128		642		483	
実施頻度	春 I 全体		秋 I 全体		シーズン全体	
週 7	17	1.5%	14	2.1%	4	0.8%
週 6	59	5.2%	27	4.1%	21	4.4%
週 5	42	3.7%	18	2.8%	29	6.1%
週 4	72	6.3%	29	4.4%	27	5.6%
週 3	163	14.3%	66	10.1%	67	14.0%
週 2	343	30.0%	187	28.7%	130	27.1%
週 1	340	29.8%	209	32.1%	126	26.3%
月 2	63	5.5%	54	8.3%	33	6.9%
月 1	43	3.8%	48	7.4%	42	8.8%
計	1142		652		479	
実施頻度	春 I 男子		秋 I 男子		シーズン男子	
週 7	11	1.2%	12	2.4%	3	0.9%
週 6	35	4.0%	20	4.0%	16	4.6%
週 5	35	4.0%	16	3.2%	24	6.9%
週 4	55	6.2%	22	4.4%	24	6.9%
週 3	141	16.0%	54	10.8%	58	16.7%
週 2	269	30.5%	140	28.0%	88	25.4%
週 1	257	29.1%	163	32.6%	80	23.1%
月 2	43	4.9%	36	7.2%	24	6.9%
月 1	36	4.1%	37	7.4%	30	8.6%
計	882		500		347	
実施頻度	春 I 女子		秋 I 女子		シーズン女子	
週 7	6	2.3%	2	1.3%	1	0.8%
週 6	24	9.3%	7	4.6%	5	3.8%
週 5	7	2.7%	2	1.3%	5	3.8%
週 4	17	6.6%	7	4.6%	3	2.3%
週 3	22	8.5%	12	7.9%	9	6.8%
週 2	74	28.6%	47	30.9%	42	31.8%
週 1	82	31.7%	46	30.3%	46	34.8%
月 2	20	7.7%	18	11.8%	9	6.8%
月 1	7	2.7%	11	7.2%	12	9.1%
計	259		152		132	

### 3) 体育実技履修理由について

表2-8は体育実技を履修した理由についての回答を示したものである(複数回答可)。「授業で運動がしたかった」、「技量・技術をアップしたい種目があった」の2つが多くを占め、特にウィークリーでは前者が圧倒的に多く、約8割がこれを理由に挙げた。一方シーズンでは、後者を理由として挙げる割合がウィークリーより高かった。また、「友達と一緒に楽しみたい」が、春、秋、シーズン共通して3割程度あった。さらに、女子では「教職過程に必要なだから」が男子より多かった。

表2-8 体育実技を履修した理由(複数回答可)

質問項目	調査時期	総回答数	男子	女子	運動実施有り	運動実施なし
授業で運動がしたかった	春I	1442 79.5%	1093 80.2%	347 77.5%	855 76.4%	587 84.6%
	秋I	935 81.4%	665 81.4%	270 82.3%	479 77.3%	397 87.3%
	シーズン	420 53.0%	308 55.6%	112 47.9%	230 47.7%	174 59.6%
技量・技術をアップアップしたい種目があった	春I	515 28.4%	394 28.9%	121 27.0%	368 32.9%	147 21.2%
	秋I	282 24.5%	206 25.2%	76 23.2%	94 15.2%	59 13.0%
	シーズン	321 40.5%	232 41.9%	89 38.0%	213 44.2%	97 33.2%
単位が楽にとれると思ったから	春I	280 15.4%	231 17.0%	49 10.9%	192 17.2%	88 12.7%
	秋I	157 13.7%	126 15.4%	31 9.5%	94 15.2%	59 13.0%
	シーズン	187 23.6%	141 25.5%	46 19.7%	120 24.9%	56 19.2%
教職課程に必要なだから	春I	240 13.2%	126 9.3%	114 25.4%	128 11.4%	112 16.1%
	秋I	126 11.0%	68 8.3%	58 17.7%	55 8.9%	66 14.5%
	シーズン	149 18.8%	84 15.2%	65 27.8%	77 16.0%	67 22.9%
授業に空きがあるから・時間があるから	春I	372 20.5%	306 22.5%	66 14.7%	235 21.0%	137 19.7%
	秋I	240 20.9%	188 23.0%	52 15.9%	150 24.2%	81 17.8%
	シーズン	77 9.7%	56 10.1%	21 9.0%	47 9.8%	29 9.9%
昨年度履修してよいと思う種目、担当者があった	春I	96 5.3%	83 6.1%	16 3.6%	59 5.3%	37 5.3%
	秋I	106 9.2%	85 10.4%	21 6.4%	74 11.9%	28 6.2%
	シーズン	27 3.4%	22 4.0%	5 2.1%	22 4.6%	5 1.7%
友達と一緒に楽しみたい	春I	356 19.6%	266 19.5%	91 20.3%	277 20.3%	129 18.6%
	秋I	272 23.7%	171 20.9%	101 30.8%	152 24.5%	100 22.0%
	シーズン	190 24.0%	126 22.7%	64 27.4%	119 24.7%	64 21.9%
その他	春I	96 5.3%	69 5.1%	27 6.0%	63 5.6%	33 4.8%
	秋I	71 6.2%	46 5.6%	25 7.6%	33 5.3%	31 6.8%
	シーズン	80 10.1%	51 9.2%	29 12.4%	52 10.8%	24 8.2%

### 4) 来年度の体育実技履修について

表2-9は来年度の体育実技についての回答である。全般に約4割程度が「来年も履修する」と回答したが、女子が男子より10%程度低かった。学部別にみると、文学部が他学部比べて「来年履修する」の割合が低かった。また、学年別では、ウィークリーで1年生が男女とも半数以上が「来年履修する」と回答し、2年生でその割合が減少するものの3年生で4割程と比率はやや高かった。

表2-9 来年度以降も体育実技を履修するか（実数及び％）

	履修する			履修しない			未定		
	春 I	秋 I	シーズン	春 I	秋 I	シーズン	春 I	秋 I	シーズン
総数	781 43.1%	451 39.3%	290 36.6%	267 14.7%	190 16.5%	113 14.2%	756 41.7%	497 43.3%	377 47.5%
男子	628 46.1%	344 42.1%	216 39.0%	184 13.5%	128 15.7%	79 14.3%	541 39.7%	341 41.7%	248 44.8%
女子	153 34.2%	106 32.3%	73 31.2%	83 18.5%	62 18.9%	33 14.1%	215 48.0%	156 47.6%	128 54.7%
学部									
文	69 22.9%	27 17.3%	29 24.2%	53 17.6%	29 18.6%	18 15.0%	179 59.5%	98 62.8%	68 56.7%
経済	167 46.1%	102 41.8%	48 45.3%	50 13.8%	47 19.3%	10 9.4%	145 40.1	93 38.1%	45 42.5%
法(政)	127 53.8%	72 42.9%	50 53.8%	25 10.6%	17 10.1%	6 6.5%	84 35.6%	78 46.4%	37 39.8%
法(法)	114 48.3%	76 38.0%	11 22.0%	41 17.4%	40 20.0%	8 16.0%	81 34.3%	81 40.5%	32 64.0%
商	115 41.7%	66 37.1%	35 41.2%	58 21.0%	35 19.7%	13 15.3%	103 37.3%	76 42.7%	36 42.4%
医	3 75.0%	1 50.0%	1 50.0%	0 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	1 25.0%	0 0.0%	1 50.0%
理工	186 47.8%	107 53.2%	116 34.8%	40 10.3%	12 10.4%	58 17.4%	163 41.9%	71 35.5%	157 47.1%
学									
1年	649 56.1%	362 53.9%	220 44.0%	80 6.9%	54 8.0%	51 10.2%	427 36.9%	251 37.4%	223 44.6%
2年	011 7.9%	68 17.5%	59 25.5%	152 27.3%	95 24.5%	41 17.7%	295 53.0%	225 58.0%	128 55.4%
3年	22 32.4%	18 48.6%	10 22.2%	18 26.5%	1 2.7%	11 24.4%	28 41.2%	18 48.6%	22 48.9%
運動実 施有 り	513 46.0%	264 42.6%	200 41.5%	152 13.6%	97 15.6%	59 12.2%	451 40.4%	255 41.1%	201 41.7%

5) 学生による授業評価

図1は、授業に関する各質問項目の5段階評価を、「どちらともいえない」を0点、「非常にそう思う」を2点、「全くそう思わない」を-2点として得点化し、平均値と標準偏差(SD)を示したものである。全般には1点(そう思う)付近の評価が平均的であったが、施設、用具の充実面では1点に満たず相対的に低い評価であった。また、表2-10、2-11、2-12には春学期・秋学期ウィークリーとシーズンの各種目別の評価を資料として示した。

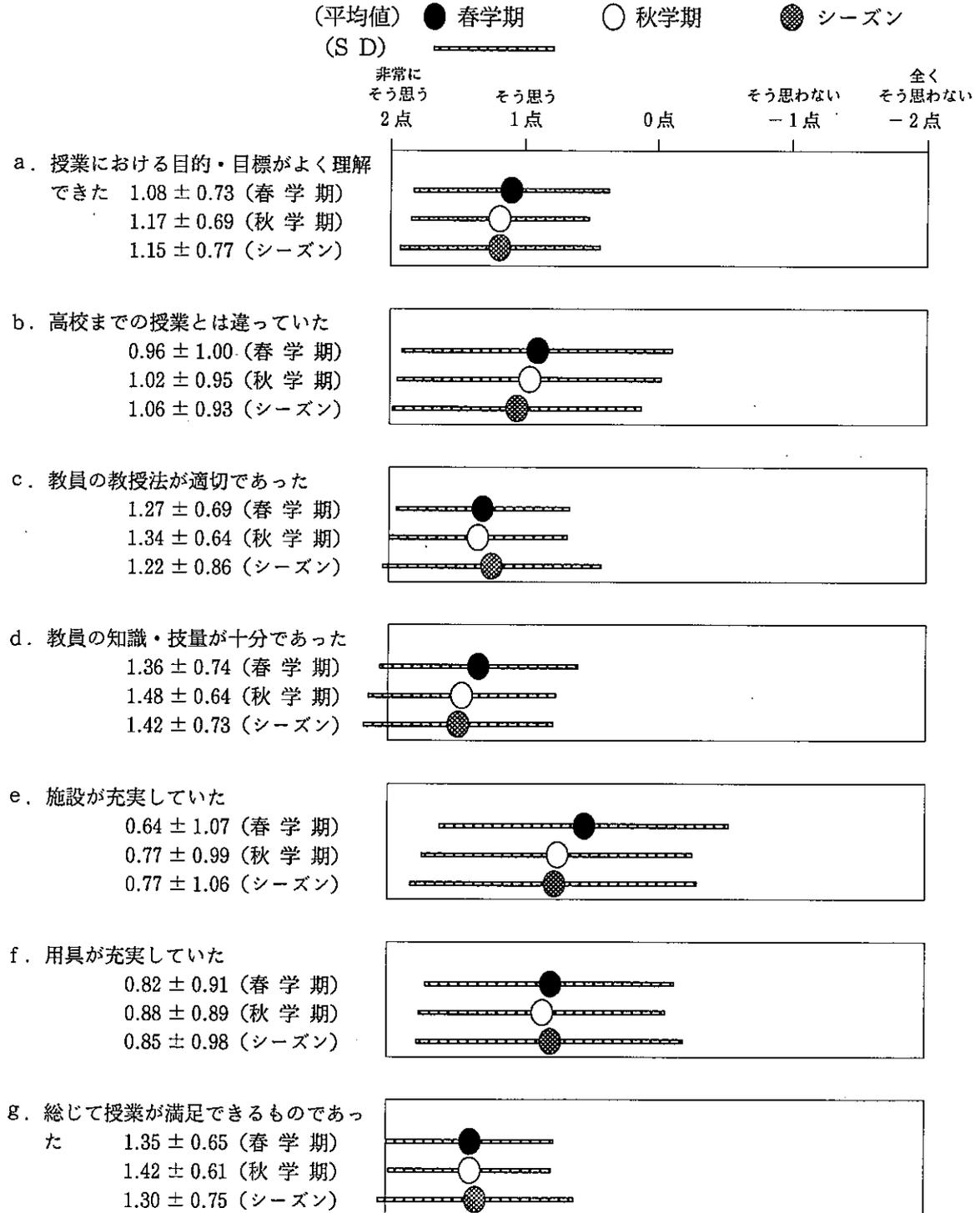


図1 学生による授業評価の全体平均

表 2-10 春学期ウィークリー種目 5 段階評価一覧 (順不同)

種目		目的目標 高校比較 教授法 知識技量 施設充実 用具充実 授業満足						
		a	b	c	d	e	f	g
アメリカンタッチフットボール N=7	AVG	1.00	0.86	1.57	1.57	0.29	0.71	1.57
	SD	0.58	0.69	0.53	0.79	0.76	0.76	0.53
インドアスポーツ N=19	AVG	1.00	0.26	1.00	1.00	0.84	1.00	1.16
	SD	0.82	1.19	0.88	0.88	0.83	0.75	0.90
エアロビクス N=110	AVG	1.34	1.18	1.59	1.65	0.87	0.79	1.61
	SD	0.58	0.87	0.52	0.61	1.00	0.87	0.53
ゴルフ N=42	AVG	0.83	1.31	0.74	0.83	0.55	0.64	1.17
	SD	0.79	0.84	0.73	0.66	0.99	0.93	0.66
サッカー N=223	AVG	0.95	0.73	1.12	1.33	-0.08	0.37	1.13
	SD	0.78	0.99	0.66	0.63	1.04	0.93	0.64
ジョギング N=25	AVG	1.08	0.96	1.28	1.40	0.40	0.48	1.12
	SD	0.57	0.89	0.46	0.50	0.82	0.82	0.60
ソフトテニス N=24	AVG	1.13	1.04	1.29	1.54	-0.04	0.58	1.21
	SD	0.74	0.95	0.69	0.72	1.12	0.88	0.83
ソフトボール N=223	AVG	0.84	0.70	1.05	1.03	0.62	0.90	1.33
	SD	0.73	1.13	0.76	0.84	0.95	0.84	0.63
ダンス N=78	AVG	1.23	1.32	1.30	1.45	0.78	0.64	1.49
	SD	0.58	0.82	0.69	0.60	0.91	0.84	0.55
テニス N=151	AVG	1.02	1.06	1.35	1.46	1.13	1.09	1.40
	SD	0.66	0.76	0.57	0.63	0.90	0.86	0.65
テニス(三田) N=47	AVG	1.45	1.43	1.64	1.66	0.55	0.83	1.51
	SD	0.58	0.65	0.53	0.52	1.18	0.95	0.51
ニュースポーツ N=84	AVG	0.81	1.11	1.13	1.04	0.58	0.93	1.06
	SD	0.74	0.91	0.64	0.77	0.95	0.76	0.78
バスケットボール N=316	AVG	1.09	0.81	1.29	1.25	0.74	0.94	1.45
	SD	0.71	1.12	0.64	0.74	1.05	0.76	0.60
バスケットボール女子 N=28	AVG	1.00	0.89	1.32	1.21	0.36	0.75	1.50
	SD	0.82	0.83	0.61	0.79	1.10	0.84	0.58
バドミントン N=132	AVG	1.01	0.76	1.10	1.48	0.47	0.54	1.14
	SD	0.70	1.10	0.75	0.73	1.01	1.07	0.63
バレーボール N=209	AVG	1.10	0.79	1.17	1.17	0.28	0.47	1.40
	SD	0.79	1.15	0.76	0.84	1.15	1.01	0.67
バレーボール(三田) N=18	AVG	1.50	1.00	1.89	1.78	0.67	1.11	1.83
	SD	0.62	0.91	0.32	0.43	0.77	0.68	0.38
ハンドボール N=25	AVG	1.28	1.32	1.60	1.76	1.24	1.40	1.60
	SD	0.68	0.85	0.50	0.44	0.83	0.76	0.58
ボクシング N=14	AVG	1.64	1.43	1.64	1.71	1.21	1.21	1.57
	SD	0.50	0.65	0.50	0.47	0.80	0.80	0.51
ホッケー N=25	AVG	1.32	1.56	1.60	1.88	1.88	1.92	1.64
	SD	0.80	0.58	0.58	0.33	0.44	0.28	0.49
ラクロス N=27	AVG	0.56	0.67	1.11	1.19	0.74	1.04	1.15
	SD	0.80	1.14	0.75	0.83	0.98	0.90	0.77
合気道 N=31	AVG	0.94	1.10	1.30	1.55	0.42	0.48	1.13
	SD	0.81	1.01	0.79	0.81	0.99	0.93	0.85
剣道 N=32	AVG	1.19	1.03	1.53	1.56	0.75	0.88	1.31
	SD	0.59	1.06	0.51	0.67	0.76	0.83	0.54
柔道 N=26	AVG	1.35	0.92	1.54	1.81	0.88	0.69	1.65
	SD	0.69	0.98	0.58	0.40	1.07	1.09	0.49
水泳 N=92	AVG	1.35	1.34	1.58	1.68	0.82	0.95	1.49
	SD	0.69	0.75	0.58	0.59	0.92	0.86	0.56
体力アップ N=103	AVG	1.42	1.37	1.53	1.75	1.34	1.31	1.47
	SD	0.60	0.80	0.59	0.48	0.82	0.83	0.64
卓球 N=101	AVG	1.08	0.84	1.21	1.28	0.29	0.96	1.26
	SD	0.74	0.98	0.67	0.81	1.18	0.84	0.61
野球 N=33	AVG	0.85	1.36	1.12	1.39	1.61	1.48	1.15
	SD	0.62	0.60	0.60	0.66	0.56	0.62	0.71
陸上競技 N=20	AVG	1.20	1.20	1.55	1.60	0.70	0.55	1.45
	SD	0.77	0.77	0.69	0.60	0.66	0.60	0.60

表 2-11 秋学期ウィークリースポーツ種目別 5 段階評価一覧 (順不同)

種 目		目的目標	高校比較	教授法	知識技量	施設充実	用具充実	授業満足
		a	b	c	d	e	f	g
アメリカンタッチフットボール	AVG	1.29	1.14	1.36	1.57	0.43	1.21	1.57
	N=14 SD	0.61	0.86	1.08	0.76	1.22	0.80	0.51
インドアスポーツ	AVG	1.14	0.91	1.17	1.29	0.71	0.97	1.14
	N=35 SD	0.73	0.92	0.66	0.67	0.89	0.71	0.73
エアロビクス	AVG	1.40	1.17	1.66	1.65	1.30	1.11	1.70
	N=83 SD	0.60	0.70	0.50	0.50	0.66	0.77	0.51
サッカー	AVG	1.12	0.74	1.27	1.49	0.07	0.57	1.32
	N=138 SD	0.74	1.20	0.67	0.66	1.04	0.97	0.66
ジョギング	AVG	1.25	1.15	1.45	1.60	0.30	0.35	1.45
	N=20 SD	0.55	0.88	0.51	0.50	0.66	0.49	0.51
ソフトテニス	AVG	1.71	1.06	1.82	1.82	0.71	0.94	1.71
	N=17 SD	0.47	0.90	0.39	0.39	1.05	0.90	0.47
ソフトボール	AVG	0.79	0.80	1.02	1.10	0.40	0.61	1.16
	N=179 SD	0.72	0.95	0.68	0.71	1.00	0.95	0.64
ダンス	AVG	1.34	1.26	1.41	1.67	0.75	0.70	1.55
	N=58 SD	0.51	0.89	0.50	0.48	0.93	0.82	0.50
テニス	AVG	1.22	1.15	1.44	1.56	1.24	1.16	1.47
	N=86 SD	0.64	0.71	0.62	0.58	0.83	0.81	0.59
ニュースポーツ	AVG	1.09	1.48	1.17	1.20	0.61	1.09	1.28
	N=46 SD	0.66	0.72	0.64	0.72	0.93	0.78	0.62
バスケットボール	AVG	1.34	1.11	1.47	1.61	0.68	0.83	1.58
	N=212 SD	0.65	0.97	0.57	0.54	0.95	0.90	0.53
バドミントン	AVG	1.02	0.85	1.29	1.63	1.02	1.12	1.33
	N=123 SD	0.64	0.98	0.60	0.59	0.82	0.81	0.63
バレーボール	AVG	1.16	0.83	1.35	1.37	0.50	0.54	1.52
	N=203 SD	0.70	0.97	0.61	0.69	1.05	0.94	0.56
ハンドボール	AVG	1.30	0.95	1.25	1.30	0.85	1.00	1.30
	N=20 SD	0.57	0.94	0.64	0.73	0.81	0.79	0.73
ボクシング	AVG	1.33	1.20	1.40	1.33	1.20	1.20	1.47
	N=15 SD	0.49	0.77	0.51	0.49	0.56	0.56	0.52
ホッケー	AVG	0.85	1.15	1.20	1.50	1.90	1.65	1.35
	N=20 SD	0.81	0.59	0.52	0.61	0.31	0.59	0.49
ラクロス	AVG	0.82	0.94	1.25	1.47	0.94	1.00	1.29
	N=17 SD	0.53	1.14	0.45	0.51	0.75	0.71	0.47
合気道	AVG	1.25	1.11	1.63	1.75	0.50	0.79	1.50
	N=28 SD	0.80	0.99	0.63	0.52	1.17	0.92	0.75
弓術	AVG	1.53	1.43	1.47	1.60	1.53	1.53	1.60
	N=15 SD	0.52	0.65	0.64	0.63	0.52	0.52	0.51
剣道	AVG	1.41	1.17	1.66	1.66	1.38	1.07	1.66
	N=29 SD	0.57	0.71	0.61	0.61	0.82	1.10	0.55
柔道	AVG	1.43	1.00	1.53	1.82	1.13	0.87	1.58
	N=38 SD	0.60	0.90	0.60	0.39	0.88	0.93	0.50
水泳	AVG	1.50	1.50	1.63	1.75	0.75	0.75	1.75
	N=8 SD	0.73	0.75	0.74	0.57	0.79	0.64	0.57
体力UP	AVG	1.40	1.52	1.50	1.64	1.38	1.35	1.44
	N=86 SD	0.62	0.66	0.57	0.53	0.65	0.66	0.52
卓球	AVG	1.16	0.90	1.15	1.34	0.90	1.04	1.25
	N=89 SD	0.62	1.03	0.72	0.66	0.88	0.78	0.66
野球	AVG	0.82	0.94	1.25	1.47	0.94	1.00	1.29
	N=26 SD	0.53	1.14	0.45	0.51	0.75	0.71	0.47
陸上競技	AVG	1.06	1.41	1.59	1.65	0.82	0.88	1.47
	N=17 SD	0.66	0.62	0.51	0.49	0.73	0.70	0.51

表 2-12-1 シーズンスポーツ 5 段階評価種目別集計一覧 (順不同)

種 目		目標目的	高校比較	教授法	知識技量	施設充実	用具充実	授業満足
		a	b	c	d	e	f	g
バレーボール	AVG	0.88	0.58	1.23	1.37	-0.12	0.60	1.28
	SD	0.66	1.18	0.75	0.58	0.98	0.73	0.63
ヨット	AVG	1.14	1.60	1.24	1.33	-0.10	0.98	1.45
	SD	0.68	0.59	0.82	0.75	1.43	0.95	0.67
バドミントン	AVG	0.92	0.65	0.96	1.43	0.65	0.91	1.04
	SD	0.65	0.98	0.80	0.68	0.86	0.87	0.78
サッカー	AVG	1.05	0.45	1.00	1.41	0.23	0.55	1.23
	SD	0.72	1.10	0.69	0.59	1.15	0.80	0.53
陸上競技	AVG	1.20	1.60	1.60	1.80	1.40	1.40	1.60
	SD	0.45	0.55	0.55	0.45	0.55	0.55	0.55
柔道	AVG	1.27	1.18	1.55	1.82	0.73	0.82	1.64
	SD	0.65	1.08	0.93	0.40	1.19	1.25	0.50
アウトドアレクリエーション	AVG	1.40	1.46	1.60	1.66	1.77	1.69	1.80
	SD	0.77	0.95	0.65	0.48	0.43	0.47	0.47
剣道	AVG	1.00	1.17	1.50	1.50	1.17	1.17	1.33
	SD	0.63	0.41	0.55	0.84	0.75	0.75	0.82
馬術	AVG	1.60	1.60	1.37	1.07	1.37	1.27	1.53
	SD	0.50	0.77	0.72	1.23	0.93	0.94	0.82
自動車	AVG	1.26	1.57	1.39	1.50	0.57	0.39	1.33
	SD	0.85	0.75	0.77	0.66	1.20	1.27	0.76
ウェイトリフティング	AVG	1.38	1.13	1.50	1.63	0.75	0.88	1.50
	SD	0.74	0.83	0.53	0.52	0.71	0.83	0.53
ラグビー	AVG	1.29	1.00	1.71	1.86	0.57	0.57	1.14
	SD	0.76	0.82	0.49	0.38	1.27	1.27	0.90
軟式野球	AVG	0.19	0.65	-0.48	0.06	0.48	0.26	0.35
	SD	0.95	1.05	1.09	1.00	0.93	1.09	1.05
フェンシング	AVG	1.33	1.22	1.44	1.67	1.11	0.78	1.78
	SD	0.50	0.67	0.73	0.50	0.93	1.09	0.44
弓術	AVG	1.41	1.26	1.69	1.67	1.30	1.19	1.74
	SD	0.57	0.78	0.51	0.51	0.79	0.83	0.44
水泳	AVG	1.38	1.31	1.54	1.65	1.23	1.19	1.46
	SD	0.57	0.85	0.58	0.52	0.73	0.69	0.54
ボクシング	AVG	1.50	1.60	1.80	1.80	1.70	1.40	1.80
	SD	0.53	0.52	0.42	0.42	0.48	0.97	0.42
少林寺拳法	AVG	1.50	0.70	1.50	1.90	1.00	1.10	1.50
	SD	0.53	1.34	0.97	0.32	1.15	0.88	0.71

表 2-12-2 シーズンスポーツ 5 段階評価種目別集計一覧 (順不同)

種 目		目標目的		高校比較	教授法	知識枝量	施設充実	用具充実	授業満足
		a	b	c	d	e	f	g	
アメリカンタッチフットボール N=28	AVG	1.25	1.04	1.39	1.54	0.21	0.32	1.21	
	SD	0.84	0.88	0.79	0.84	1.23	1.31	0.96	
バスケットボール N=48	AVG	1.10	1.10	1.25	1.38	0.77	1.06	1.27	
	SD	0.72	0.83	0.60	0.61	0.86	0.73	0.64	
硬式野球 N=9	AVG	1.00	1.11	0.78	0.89	1.33	1.00	1.00	
	SD	0.00	0.33	0.44	0.33	0.50	0.00	0.00	
ソフトボール N=16	AVG	1.00	1.06	0.81	0.94	1.06	1.00	1.00	
	SD	0.00	0.25	0.40	0.25	0.25	0.00	0.00	
スキー N=162	AVG	1.01	0.72	0.98	1.38	0.62	0.69	1.07	
	SD	0.96	1.02	1.05	0.74	0.98	0.85	0.79	
スケート N=28	AVG	1.29	1.46	1.39	1.54	1.00	1.04	1.54	
	SD	0.66	0.69	0.50	0.58	0.82	0.74	0.51	
レスリング N=6	AVG	1.83	1.00	1.67	1.83	1.67	1.83	1.67	
	SD	0.41	0.63	0.82	0.41	0.82	0.41	0.52	
器械体操 N=18	AVG	1.17	0.67	1.06	1.22	-0.72	-0.94	0.94	
	SD	0.71	0.69	0.80	0.65	1.13	0.94	0.73	
新体操 N=11	AVG	1.36	1.00	1.45	1.36	-0.18	-1.00	0.64	
	SD	0.50	0.00	0.69	0.81	0.98	1.26	1.21	
合気道 N=30	AVG	1.43	1.30	1.60	1.63	0.57	0.77	1.60	
	SD	0.63	0.88	0.56	0.61	1.04	0.97	0.56	
アーチェリー N=17	AVG	0.82	0.94	0.88	1.12	0.53	0.94	1.24	
	SD	0.53	0.66	0.49	0.60	0.80	0.56	0.66	
ゴルフ N=21	AVG	0.52	0.90	0.38	0.95	0.67	0.29	0.76	
	SD	0.81	1.00	0.59	0.67	1.11	0.78	0.70	
ハンドボール N=18	AVG	1.33	1.00	1.67	1.89	1.06	1.33	1.72	
	SD	0.59	0.91	0.49	0.32	0.87	0.91	0.46	
山岳 N=36	AVG	1.50	1.53	1.47	1.69	1.42	1.17	1.58	
	SD	0.51	0.56	0.56	0.47	0.69	0.94	0.50	
テニス N=51	AVG	1.24	1.14	1.49	1.57	1.35	1.29	1.49	
	SD	0.65	0.83	0.61	0.64	0.77	0.73	0.58	

## 6) 体育科目に対する要望・意見について

自由記述で回答を求めた体育科目への意見についてはその内容から項目に分け、以下に示した。

### 履修等について

- ・履修手続きの改善を望む（抽選方法の改善、抽選の廃止、等）
- ・定員の増加
- ・秋学期の登録、追加履修を可能に
- ・履修案内をわかりやすく

### 科目の開講について

- ・三田での開講科目の増加
- ・開講コマ数の増加
- ・複合種目の増加
- ・4、5時限に開講
- ・2コマ連続実施
- ・レベル別の開講
- ・開講（増設）希望種目
- ・男女比を考慮してほしい
- ・人数が多すぎる
- ・人数が少ない

### 単位について

- ・2単位化
- ・修士でも単位を
- ・医学部にも単位を出してほしい
- ・学部での制限単位数を増やしてほしい

### 施設について

- ・施設の充実を望む
- ・ロッカールームがほしい
- ・更衣室、シャワー室の拡大
- ・実施場所が遠い（下田地区）
- ・実施場所がわかりにくい
- ・用具の充実を
- ・プールを屋内に
- ・記念館、卓球場にエアコンの設置
- ・トレーニングルームをもっと開放してほしい
- ・雨天時の記念館の状態が悪い

### 授業全般的

- ・楽しい、よかった、満足
- ・友達ができた
- ・体育は必修にしたらよい
- ・事前のオリエンテーションをしてほしい
- ・授業が少ない
- ・もっと厳しく
- ・技術を教えてほしい
- ・掲示を早く出しほしい
- ・もっと三田にも情報を
- ・成績の基準を明解に

## 7) 塾内で開催を希望するスポーツイベントについて

6)の項目同様に、自由記述で回答があったスポーツイベントの開催希望種目を以下に列挙した。

- ・サッカー
- ・フットサル
- ・バスケットボール
- ・3 on 3
- ・テニス
- ・バレーボール
- ・ビーチバレー
- ・ソフトボール
- ・野球
- ・卓球
- ・スポーツ大会
- ・球技大会
- ・体育祭
- ・マラソン大会
- ・ダンスパーティ
- ・スキー、スキーツアー
- ・スノーボード
- ・ゴルフ
- ・水泳大会
- ・クラス対抗大会
- ・サークル対抗
- など



## 第3部 スポーツ振興分野

### 概 要

体育研究所では、保健体育科目の開講、体育・スポーツに関する研究活動と並んで、塾生・教職員を対象とした各種のスポーツイベントを開催している。国際化社会、情報化社会の現代は、ともすれば運動不足、ストレスの蓄積につながる。健康的な生活を送るためには、健康な心身を保つことが重要であろう。健康・スポーツに関わる研究機関である我々は、その成果を学術上の発表にとどまらず、塾生・教職員、地域の人々に広めていくこと、「開かれた大学」の一端をになう意味でもこれから重要視していきたいと考える。

今年度スポーツ振興分野では、昨年度に引き続き、塾生を対象とした各種スポーツ大会、教職員を対象としたフィットネス教室、所内スポーツ施設の開放、塾内諸機関と連携した講師派遣等を行ってきた。その中でも、塾生を対象とした各種スポーツ大会、教職員を対象としたフィットネス教室は、年を追うごとにその認知が高まり、参加者も定着してきつつある。また、大学生活懇談会主催の「スキーの集い」講師派遣も毎年の恒例行事となった。

今後、塾内においては主催のスポーツ大会・教室をさらに充実させるとともに、塾内他機関、さらには諸学校とも連携を深め、塾の健康・スポーツの発展に貢献していきたい。

その一環として、来年度はスポーツ関係者を招いた講演会・シンポジウム等を企画し、開催する予定である。また、近い将来には塾内のみならず、健康・スポーツに関する公開講座の開催など、地域社会への貢献も視野に入れて活動していきたい。



## 1. 各種スポーツイベントの開催

### 1) 学生対象イベント

#### (1) バレーボール大会

日 時：6月28日(土) 10:00~14:30

場 所：日吉記念館

参加者：21 チーム、250 名



男子リーグ11チーム、ミックスリーグ(常時2名以上女子がプレーする)10チームが参加して行われた。各リーグ3~4チームによるリーグ戦を行い、1位のチームによる決勝トーナメントを行った。バレーボールサークルの参加あり、授業で結成したチームあり、高校時代の友達によるチームありと、非常にバラエティに富んだチームの参加があり、決勝戦ではかなり高レベルな接戦が展開された。なお、男子リーグ、ミックスリーグそれぞれバレーボールのサークルであるKVCで結成したチームが優勝を飾った。

(2) ミニサッカー大会

日 時：10月18日(土)、10月25日(土) 9:00~14:00

場 所：日吉陸上競技場

参加者：16チーム、165名



秋の風物詩となったミニサッカー大会、今回も満員御礼の16チームが集まった。中には3年連続で参加のチームもあり、他チームにも顔見知りが出来てきたようだ。例年通り、4チームによるリーグ戦を行い、各リーグ1位のチームが決勝トーナメントでしのぎを削った。優勝を飾ったのはサッカーサークルで結成したチーム。しかしながら、経験者の少ないチームもそれぞれゲームを楽しんでいる姿が印象的であった。

2) 教職員対象イベント

(1) フィットネス教室(春)

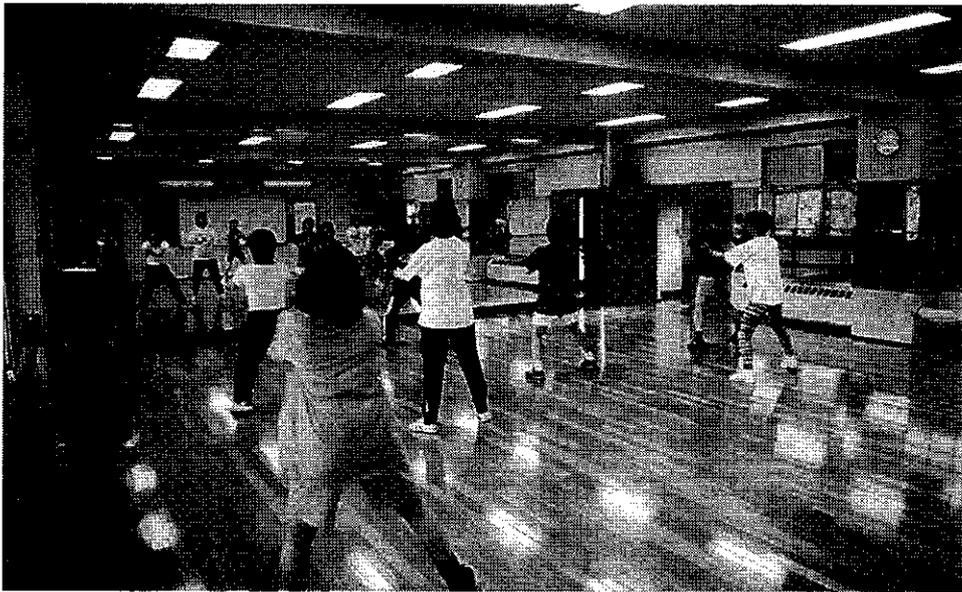
日 時：5月22日～7月3日 毎週木曜日17:00～18:00(全7回)

場 所：体育研究所3階 エクササイズスタジオ

担当者：佐々木玲子、小森康加(体育研究所)

参加者：18名

平成7年の10月に第1回目が開講され、以後春と秋、年に2回(各7、8回)のペースで継続されてきたフィットネス教室も、4回目を数えることとなった。内容も昨年度と変わらず“ソフトエアロビクスエクササイズ”を中心に、心身のリフレッシュを目的に行った。今回からは、佐々木、小森の二人で担当することとなり、参加者の方々に提供するエクササイズの内容も幅が広がったように思う。参加者の皆さんもかなりエアロビックダンスエクササイズに慣れ、照れ笑いから余裕を持った笑顔へと、動いている時の顔が最近変わってきているのを感じる。



(2) トレーニング教室（春）

日 時：5月22日～8月7日 毎週月、木曜日 16:30～18:00

場 所：体育研究所1階 トレーニングルーム

担当者：近藤明彦（体育研究所）

参加者：18名

トレーニング教室は、毎週月曜・木曜の午後4時半より6時までの予定で開催された。

昨年から引き続いて参加されている方は、各種トレーニング機器の取り扱いにも慣れており初日から各自のペースで軽快にトレーニングメニューをこなしていた。今期から初めてトレーニングを開始した参加者には、トレーニングを行うことによって身体にどのような変化があるか等について説明を行いながら、各種トレーニング機器の使用法を説明した。

漸進性の法則に従い徐々に運動強度を上げていくことにより、久々に運動を行う方々にも無理のないトレーニング内容を心がけた。仕事の都合で開始時間が遅れた参加者の中には午後7時すぎまで熱心に汗を流す方もいた。また有酸素系の運動に対する要望が多く、エアロバイクが空くのを待つ参加者が出るような日もあった。トレーニング期間は、参加者の要望もあり、8月7日まで続けられた。

### (3) フィットネス教室 (秋)

日 時：10月23日～12月11日 毎週木曜日 17:00～18:00 (全7回)

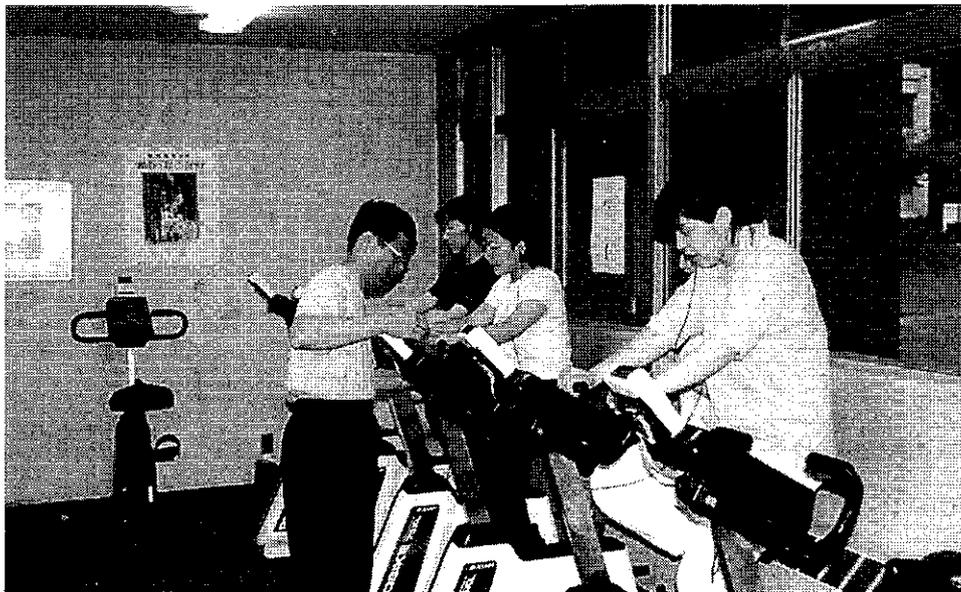
場 所：体育研究所3階 エクササイズスタジオ

担当者：佐々木玲子、小森康加 (体育研究所)

参加者：17名

昨年の秋は参加人数が少なかったが、今回は春と同じくらいの参加者があった。これまでのメンバーにさらに新たなメンバーも加わり和やかな雰囲気エクササイズを楽しんだ。

「今度の“エアロビクス”はいつからですか？」と尋ねられると、恒例のプログラムとして定着しつつあることを実感し、少々嬉しくなる。



### (4) トレーニング教室 (秋)

日 時：5月22日～1月19日 毎週月、木曜日 16:30～18:00

場 所：体育研究所1階 トレーニングルーム

担当者：近藤明彦 (体育研究所)

参加者：18名

秋学期も春学期から継続してトレーニング教室に参加される方が大半であった。しかし、11月・12月となるにつれ、毎回の参加メンバーのかをぶれも決まってきた感があった。

後半の参加人数は少々少な目となったが、最後まで定期的に参加された方々は、トレーニングを行う上で大切な継続性についてももの大切について十分理解されていたようである。

春と同様に秋のトレーニング教室も期間を延長して1月19日まで続けられた。

## 2. 大学生生活懇談会とのタイアップ事業

### 1) 第12回「スキーのつどい」への講師派遣

期 間：平成10年2月8日(日)～11日(水)

場 所：新潟県六日町ミナミスキー場 宿泊「いろり庵」

担 当：今柴貞吉、植田史生、佐々木玲子(体育研究所)

参加者：40名



「スキーのつどい」では今年度も体育研究所の所員がスキーの指導を担当した。また今回は塾生の中から自主的に指導側を希望する者も現われ、塾生同志が互いに教え、学び合う姿には、楽しそうな雰囲気の中にも真剣なまなざしが垣間見られた。回を重ねて

の参加者も多く、スキーを通じての塾生の輪が確実に広がっていくのを強く感じた。宿を後にする際、今回でひとまず参加は終了となる4年生、大学院生達が記念の集合写真を撮る姿が印象に残る。

### 3. 横浜市民講座への講師派遣

日 時：11月29日（土）

場 所：慶應義塾大学日吉キャンパス

講 師：安藤勝英、篠原しげ子（体育研究所）

テーマ：日本の柔道・世界の柔道——柔道の国際化と諸問題——（安藤勝英）  
ダンス（おどり）の西と東（篠原しげ子）

近年、国際柔道では「柔道衣の色」を巡って様々な論議を呼んでいる。欧州を中心にした「観る柔道」のためには対戦者がそれぞれ違う色の柔道衣を着用するのが望ましい、とする方向に対し、柔道を国技とする日本は、伝統的な「白は純潔を表す」として「白」を主張して柔道衣のカラー化に反対の立場をとっている。

また、柔道修行の中で最も重要とする「礼法」についても世界の間では同様の問題が生じている。

言い換えれば、「スポーツとしての柔道」と日本古来から伝わる「武道としての柔道」の考え方の違いからこのような問題が発生している。

ここでは、20数年間の外国における柔道指導の経験を基に日本と欧米の考え方・文化の違いを述べた。

（安藤勝英）

ダンス（おどり）とは、人間が己の肉体のリズムカルな動きによって、何らかの情景を表現するものである。これをどういう人間がどういう意識のもとに、いかに表現するかなどの条件次第で千差万別のダンスが生じる。

西洋のダンスは大地から解放されて自分の存在を確かめるために踊られる。そのため、高く天上へ自由を求め、外へ外へと跳躍する動きが多く、足を使うのに対して、日本の踊りはこの地上をそのまま楽土と現ずるもので、腰を入れてしっかり構えて動かないことが理想とされ、テンポもゆっくりで足の動きより手の動きが多い。西洋のダンスの足の表現が多いのは、家畜を追いかける牧畜民族の文化によるもので、農耕民族である日本の踊りは土をしっかりと踏みしめて耕すためには手の自由が利くことが大事で、手をつなぐことが少なく、手による表現が多くみられるなど、文化や気候風土による気質、服装、生活様式の違いによりダンスも異なることを、各国特有のダンスである民族舞踊を例に映像を見ながら紹介した。

また、同じ歩くという動作を、クラシックバレエ（西）と日本舞踊（東）での筋肉の使い方の違いを筋電図をもとに紹介した。

（篠原しげ子）

#### 4. 所内施設の開放

##### 1) 体育研究所 3 F 「エクササイズスタジオ」の開放

所内施設開放の一環として、3 F 「エクササイズスタジオ」を授業時間以外にサークル等に開放している。

##### 2) 体育研究所 1 F 「トレーニングルーム」の開放

所内施設開放の一環として、1 F 「トレーニングルーム」を授業時間以外に開放し、所員がトレーナーとなって、器具の説明、健康体力テストの実施、トレーニングプログラムの作成等を行っている。

表 3-1 トレーニングルーム開放時間

	春 学 期	秋 学 期
月	10:00~17:00	10:00~17:00
火	10:00~17:00	10:00~17:00
水	終日クローズ	終日クローズ
木	10:00~14:30	10:00~14:30
金	終日クローズ	終日クローズ
土	終日クローズ	終日クローズ

表 3-2 トレーニングルーム利用者数

	学 生	教職員	合 計
春学期	225	93	318
秋学期	274	68	342
年 間	499	161	660

## 編集後記

このような活動報告書の発行も今回で3回目になる。研究所の研究教育活動も一応にご理解いただければ幸いである。

大学教育・研究の在り方は、こと体育に限らず、他大学においても試行錯誤しながら最良の方法を求めている。スポーツを実施することにより、生涯にわたり心身ともに豊かになれるか、その実践的効果をどのような形で実技・理論を通して教育するか、ここに難しさがある。

塾生、平成9年度体育実技総履修者数は、体育Ⅰ、Ⅱを通し9,213名であった。この数が多い少ないは別にし、「塾生の運動実施に関する実態調査」、また「授業内容についてのアンケート」実施を行い、その評価から何らかの答えを出そうとしている。

体育研究所は、大テーマ「21世紀のスポーツ・健康教育——慶應義塾を発信源として——」を掲げた。この目標に向かって前進しているのは確かである。さらによいものを求めて、平成10年度の活動は既に展開し始めている。

総務委員会委員長（活動報告書編集担当）

安藤 勝英

### 平成9年度活動報告書

平成10年7月1日発行

[非売品]

編集：活動報告書編集委員会

高嶺 隆二 安藤 勝英 山内 賢

加藤 大仁 野口 和行

発行：慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

制作：(有)梅沢印刷所

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45